

2003 年度 中国青年招へい事業

「青年海外協力隊
日本語教師招へい計画」

参加者報告書

JICA LIBRARY



1175608(7)

2004 年 3 月

独立行政法人 国際協力機構 中国事務所

CNO
JR
03-01

2003 年度 中国青年招へい事業
「青年海外日本語教師招へい計画」
参加者報告書

2004 年 3 月 31 日

編集・発行

独立行政法人国際協力機構中国事務所

100004 北京市東三環北路 5 号

北京發展大厦 1111 号室

(TEL) 0086-10-6590-9250

(FAX) 0086-10-6590-9260

無断転載を禁ず。

2004 年度青年招へい事業

「青年海外協力隊
日本語教師招へい計画」

参加者報告書

目 次

1. はじめに	3
2. 写 真 編	4
3. 参加青年一覧	5
4. 招へい日程表	6
5. 参加者報告書	8

*この報告書は招聘参加者の意向を尊重し、一部固有名詞などの誤謬を除き、原則として原文のまま掲載しています。



はじめに

2003年は日中平和友好条約締結25周年の記念すべき年であり、また私どもJICAが10月1日に独立行政法人国際協力機構として新しい一歩を踏み出した記念すべき年でもありました。中国における20年余の当機構の活動の中で、青年海外協力隊事業は、1986年に隊員4名の赴任によりスタートしました。それから18年、2004年3月現在、累計522名の青年海外協力隊員が派遣され（活動中の隊員66名）、そのうち日本語教師隊員は249名とほぼ半数近くを占めています。

この日本語教師隊員たちが活動する中国各地の学校には、隊員を受け入れ、隊員と共に日本語教育に携わる中国人日本語教師の方々が数多くおられます。その多くは、日本が好きで日本語を学び、そして現在日本語を生涯の仕事として選び、情熱を持って日本語を教えている方々です。

「青年海外協力隊日本語教師招へい計画」は、この日中両国の相互理解の掛け橋となっている皆様に、実際に日本へ行って生の日本を経験し、日本と日本人をより深く理解していただくとともに、日本国内の新しい日本語教育法を学び、それを中国での日本語教育に生かしてもらうことを目指して、2002年度「青年招へい事業」の一環として初めて実現したものです。「青年招へい事業」は、JICAが発展途上国を対象に実施する技術協力の一形態として、将来の国づくりを担う青年を専門分野別に3週間余り日本へ招聘し、それぞれの分野について学ぶとともに、ホームステイ受入家族などの幅広い交流を通じて相互理解を深め、信頼と友情を築くことを目的としています。

この報告書は同招へい計画の実施2年目にあたる2003年度の参加者20名全員の報告書を集めたものです。「百聞は一見に如かず」。初めての日本で、それまで学び、教えてきた日本と現実の日本との共通点と微妙な差異とに戸惑い、ホームステイで受けた親切に感銘し、日本の先生や生徒たちとの交流に胸弾ませながら過ごした3週間の実り豊かな日々が、参加者自身の日本語によって生き生きと描かれています。また、直接日本語でさまざまな日本人と交流することで自らの日本語をブラッシュアップしていく様子も一人一人の報告から見えてきます。本報告書が「青年招へい事業」及び「青年海外協力隊事業」の更なる発展の指針となり、また参加者はじめ関係者の皆様の良き思い出の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本招へい計画の実現及び受け入れに御尽力いただいた皆様に改めてお礼申し上げますと共に、「青年招へい事業」がさらに有意義なプログラムとなりますよう、今後ともご支援、ご協力賜りたくお願い申し上げます。

2004年3月

独立行政法人国際協力機構中国事務所

所長 櫻田 幸久



全員集合！

(成田空港にて、寧夏大学・王剛青年提供)



北京の歓送レセプションで日本語の歌を合唱する参加団員の皆さん

招 へ い 参 加 者 一 覧

番号	氏名	性別	所 属 先	備考
1	白 楊	女	科学技術部中日技術合作事務中心	団長
2	殷 海英	女	吉林省長春市朝鮮族中学	団員
3	成 基南	女	吉林省梅河口市第二中学	団員
4	趙 海淑	女	遼寧省瀋陽市朝鮮族第一中学	団員
5	金 花	女	内蒙古民族高等専科学校	団員
6	金 容蘭	女	吉林省吉林市朝鮮族中学	団員
7	張 茹	女	吉林省鎮賚県第一中学	団員
8	龍 婷	女	江西旅遊商貿職業学院外事弁公室	団員
9	游 凌	男	湖北省三峡大学外国語学院	団員
10	姜 丹	女	遼寧中医学院	団員
11	李 倫	女	湖北黄崗師範学院	団員
12	王 剛	男	寧夏大学外国語学院	団員
13	于 潔	男	蘭州理工大学外国語学院	団員
14	徐 英錦	女	延辺大学外国語学院	団員
15	馬 慧婕	女	広西大学外国語学院	団員
16	元 明松	男	大連民族学院	団員
17	茹先·伊明	女	新疆師範大学外国語学院	団員
18	楊 鋼	男	湖北師範学院	団員
19	何 薇	女	貴州大学外国語・国際教育学院	団員
20	曾 偉	男	北京青年報 記者	団員

(敬称略)

青年邀请计划日程表, JICA

中華人民共和国 JOCV日本語教師 分团

from 11/26 to 12/18

日期	星期	时间	日程内容	实施地点	饭店名
11/26	三		到达成田国际机场	东京都	东京国际中心
11/27	四	9:30 11:30	注册手续, 说明会		东京国际中心 (TIC)
11/27	四	13:00 14:00	开幕式 (请穿正装, 佩带胸牌)		03-3485-7051
11/27	四	14:20 15:10	介绍接待单位		
11/27	四	15:20 17:20	日语学习 (1)		
11/28	五	9:00 11:30	了解日本的基础讲座《日本国和日本人》		
11/28	五	13:00 15:30	了解日本的基础讲座《日本战后发展史》		
11/28	五	15:45 17:45	日语学习 (2)		
11/29	六	9:00 11:30	日语学习 (3)		
11/29	六	12:00 17:00	实地日语会话练习		
11/30	日		自修		
12/1	一	AM	访问国际善邻学院		
12/1	一	PM	访问凡人社		
12/2	二	AM	访问国际交流基金日本語中心		
12/2	二	PM	访问埼玉县伊奈学园综合高中 (中文教育)		
12/3	三	9:00 17:00	访问早稻田大学日本語研究中心 (教员培训课程)		
12/4	四	AM	参观国际基督教大学日语教育课程		
12/4	四	PM	都内参观 歌舞伎观赏		
12/5	五	AM	赴河口湖参加合宿活动	山梨县	河口湖
12/5	五	PM	合宿活动		
12/5	五	PM	文艺交流晚会		
12/6	六	AM	合宿活动 (分组讨论 1)		同上
12/6	六	AM	合宿活动 (分组讨论 2)		
12/6	六	PM	交流会		
12/7	日	AM	全体会	东京都	河口湖
12/7	日	PM	返回东京		东京国际中心 03-3485-7051
12/8	一		自修		
12/9	二	AM	赴高知县	高知县	高知县
12/9	二	PM	活动日程说明会 拜访县知事		
12/10	三	AM	访问宫东小学 参加当一天老师的活动		
12/10	三	PM	参加保玲球人会 与当地青年交流		
12/11	四	AM	访问叶山村教委		
12/11	四	PM	与教职员工交换意见 (中小学)		
12/12	五	AM	参观明德义塾中学		各民宿家庭
12/12	五	PM	与民宿主人见面 参加民宿活动		
12/13	六		民宿活动	高知县	各民宿家庭

青年邀请计划日程表, JICA

中華人民共和国 JOCV日本語教師 分団

from 11/26 to 12/18

日期	星期	时间	日程内容	实施地点	饭店名
12/14	日	AM	民宿活动		各民宿家庭
12/14	日	PM	返回饭店 与合宿家庭共同参加欢送会		
12/15	一	AM	参观西高中		
12/15	一	PM	参观学习塾 (算数补习班)		
12/16	二	AM	从德岛赴新神户		
12/16	二	PM	从新神户返回东京	东京都	东京国际中心 03-3485-7051
12/17	三	AM	回国准备		
12/17	三	13:50 14:20	回国说明会		
12/17	三	14:30 15:50	总结会 (请穿正装, 佩戴胸牌)		
12/17	三	16:10 16:50	闭幕式		
12/17	三	16:50 17:30	欢送会		
12/18	四		回国		

日本訪問随想

科学技術部中日技術協力事務センター 白 楊

日本政府と独立行政法人国際協力機構の招きに応じて、全国 11 の省、自治区、直轄市からの 20 名によって構成された JICA 中国青年日本語教師訪日団は、2003 年 11 月 26 日から 12 月 18 日にかけて日本を訪問した。私は幸いにも本団に参加し、日本の土を踏むことができた。日本では東京、高知などの教育機関、行政機関、工場を訪問し、名所旧跡を参観し、特色ある文化を体験することができ、また、多くの方法で日本の人々と幅広く交流することができた。このことは一つの生き生きとした経験であったので、ささやかで至らない部分もあるが、以下に個人的な感想を述べてみたい。

東京、その経済発展と繁栄により名高い国際的都市は、同じく国際的都市である北京との類似点も多い。高層ビルが高さを競い合い、街中には商店が軒を並べ、車の流れは激しく、立体交差点が重なり合う光景である。しかし、よくよく比べてみると北京はより重厚でスケールの大きさを感じさせるが、東京は進んだ科学技術の魅力とそれがもたらす生活上の利便さが目に付くようである。

東京の地下鉄の利便性と、その網目のように張り巡らされた様子は驚くべきものであった。東京では地下鉄路線図が簡単に手に入り、色とりどりの路線は数十本に達している。日本の鉄道路線は 3 種類に分かれている。JR 線は旧国鉄に属し、主として東京郊外に分布している。地下鉄は主として環状路線であり、都内の中心区域を走っている。私鉄は大財団や個人からの資金によって建設されており、価格は JR 線や地下鉄より若干高い。地下鉄の駅の自動改札所は検札が素早く、操作も簡単である。地下鉄駅プラットホームの電光掲示板は、極めて正確に次の列車の到着時間を提示する。地下鉄駅構内の環境は快適であり、特に比較的大きな駅では通路両側に数多くの商店が並んでおり、乗り換え客に飲食や買い物サービスの提供している。地下鉄駅構内はいつもあわただしく行き交う人々で溢れており、東京のリズムの速さと効率性はひと目で見て取ることができる。

東京から高知への道すがら、我々は日本の新幹線を体験したが、その速さと安定性は技術の先進ぶりを感じ取ることができた。日本の戦後経済の飛躍的発展は、こうしたハイテクに依存した現代社会のリズムと大きな関係があることは明らかである。地下交通の慌しさに比べ、地上の様子はずっと落ち着いたものだ。地下に比べて人の流れが少ないだけでなく、都市に青々と茂る木々や優雅な庭園芸術は、こうした現代都市に静謐な趣を与えていた。

日本人は環境保護を非常に重視し、自然資源を大切にしている。そのため都市の地価は眼の飛び出るほど高いにもかかわらず、かくも広大な植生がゆったりと生い茂り、人と自然の調和した世界を築いている。日本人の環境保護の重視ぶりは、生活ゴミや産業廃棄物

の分別、廃棄物の再利用、水資源保護などにも表れている。おそらく、日本は狭い国土と少ない資源故に、自然資源を一層大切にすることもかもしれない。もちろん、より重要なことは、この数十年間の日本における環境保全技術への投入規模と立法措置による制限である。これがあってはじめて、現在の日本人がこのように美しい環境を享受できているということである。

日本の科学技術と経済は世界のトップレベルにあるため、日本人には一種の優越心理が普遍的に存在するのであろう。もっともこうした心理は、謙遜を以って知られる日本人の外見上からは、はっきりとは窺えないのであるが。外見上の差異は日本人と中国人にはほとんどない。だが長期にわたる異なる歴史と文化の蓄積と両国の現状の違いとは、両国人の個性を著しく異なるものにしてしている。もちろんこの違いは風俗習慣に限ったもので、良し悪しを論ずるものではない。日本は基本的には単一民族国家であり、北海道のアイヌ民族を除けばほぼ全てが大和民族である。その単一民族構成は、人々に国家への強烈な一体感を生じさせ、国家のために忠誠を尽くすという意識を皆が持っている。人々は仕事に対して真剣に取り組み、自分の仕事に忠実である。このことは国家に対する忠誠の一つの表れではないだろうか。そのため日本人は真剣かつ周到に物事を行い、計画性が強い。

訪日期間中、日本側の業務スタッフはいつも事前に訪問先、活動内容、関係機関の資料、出発時刻、出発地点、到着時間や列車番号までもリストアップし、参加者が事情を把握できるようにし、参加者に自分が大切にされていると感じさせるのである。もっとも時にはこのような細かい仕事ぶりが、人的・物的資源の浪費と思われることもある。日本人は物事に慎重かつ敏感であり、人や物事に対する繊細な感受性を持っており、多くの日本人が事にあたって周囲の感じ方をとても気にし、人間関係の和を極めて重視する。このような性格的特徴により、日本人がなぜこのように他人に礼儀正しく、法規・紀律を守り、他人への干渉を嫌うかを我々は容易に理解することができる。確かに多くの日本人が礼儀正しく、親切で用意周到である。

高知において私がホームステイした家庭は、3世代にわたる典型的な日本家庭だった。私は一日本家庭にわずか2日間滞在しただけであるが、中国の「一葉落ちて天下の秋を知る」という言葉どおり、この一家を通じて日本人の性格における多くの美的側面を窺うことができた。その家族は皆やや内向的であったが、かれらの親切と人懐っこさ、そして細部にわたって気を配る側面をはっきりと感ずることができた。2日間のホームステイにおいて、家族全員が私のためにびっしりとしたスケジュールを組み、一緒に観光、買い物、食事、雑談そしてゲームなどを楽しんだが、彼らはいつもなんとか私を喜ばせよう、より良い雰囲気になろうと努めていた。

帰国後、我々は連絡をとり合い、友情はますます深まっている。中日両国にもろもろの差異は存在するとしても、地理的にも、また似通った心理的特徴と外見などからも、中日両国間にはその国民間の相互理解において、一定の基礎と強みがあると言えるだろう。

今回の日本訪問は私にとって感じるところが大きかった。中日両国関係が、将来輝かしいものとなることを願っている。

日本での21日間

吉林省 長春市朝鮮族中学 殷 海英

中学から大学まで日本語を習い、卒業してからもずっと日本語教師を続けている私には、長い間、本物の日本を自分の目で見、実際に日本という土地に立って、日本という異文化を肌で感じてみたいという夢がありました。



2003年11月26日～12月18日、日本国際協力機構の招聘を受けて、私は中国青年教師代表団の一員として日本を訪問することができ、日本国、日本人、日本文化に直接触れ、日本社会を体験しました。わずか21日間でしたが、「日本と日本人」「戦後日本の歩み」講座の受講、学校や教育機関の見学、合宿セミナー、ホームステイなど、いろいろな活動を通し

て、日本の歴史と現在の状況、日本人の考え方や習慣、日本文化と中国文化の相違点を前よりもっと詳しく知り、理解を深めました。また日常のマナー、自然の重要性、人間の道徳心を学びました。

日本国：

飛行機から俯瞰した日本は、木の多い、緑豊かな美しい国でした。埃のない、木の葉がきらきら輝く美しい街、道は狭いもののその中を整然たる秩序で走っている車、澄んでいて清冽な水、川や湖でのんびり泳ぐカモメ、レストランや電車の中などの静かな公共空間…どこへ行っても静かで、きれいでした。

見事に整備されたトイレ施設、車椅子に必ずついているシートベルト、どんなに狭い道でも舗装されている黄色い点字ブロック…人間味にあふれる手配と施設を目にして、さすがに先進国だなあと感心しました。

日本人：

日本人を見て感心したのは、勤勉で規則をよく守ることと、自然を愛することでした。成田空港に着いて入国手続きをしている時も、宿泊先の国際センターでも、地下鉄の駅でも、年取った人が働いている姿をしばしば見かけました。ホームステイの時、ホストファミリーは68歳と61歳のお父さん、お母さんでしたが、定年退職後もボランティアとして

いろいろな仕事に取り組んでいました。

日本人は夜になっても信号が変わるまで待つし、切符を買う時も電車に乗る時も自然に列を作ります。町にはごみ箱がないし、清掃員もいません。誰にも注意されていないのに、みんなはごみを持ち帰り、燃えるごみ、燃えないごみ、缶や瓶のごみと別々に分けて取り扱います。

東京での活動で、ボランティアと現地会話練習をする機会がありました。一日中すごい雨でしたが、東京の街をあちこち歩き回りました。そのため帰ってきた時は靴もズボンもびしょりでしたが、不思議なことに翌朝起きた時、乾いたズボンには泥一つなく、元と同じくきれいなままでした。日本人の環境を重視する意識と自然を愛する心には頭が下がるほどでした。



前列中央が筆者

日本文化と中国文化の相違点：

日本に行く前、私は日本と中国は同じアジアの国で遠くないし、顔付きも似ているし、同じ漢字を使っている上、私の母語（注：筆者は朝鮮族）と日本語の文法は似ているから、自分の身につけた日本の文化・風俗・習慣に対する知識と言語能力で十分だろうと思っていました。しかし、今度行ってみて自分の勉強不足を痛感しました。

1 異なる死生観：講座を聞いて日本人の死生観がわかりました。

「いくら戦犯でも、犯罪者でも死んでしまえばもう罪はない」。これが日本人の一般の感情だそうです。しかし中国人の死生観は日本人とは正反対で、「死んだからといって責任を免れるわけではない」です。

異文化で育った人と交流し、友達になるためには、お互いに相手の文化を正しく理解し、相手の文化を尊重しなければならないということの重要性をしみじみ感じました。これができれば友好関係はもっとスムーズに発展していくのではないのでしょうか。

2 異なる食文化

日本と中国はいずれも米を主食としていますが、日本人は普通淡泊な魚貝類をとり、果物、野菜を好んでいます。日本での23日間、ほとんど毎日、毎食、テーブルの上には魚料理が用意されていました。魚の酢漬、刺し身、天ぷら…。海に恵まれているので、食文化も海洋の影響を受けたためでしょう。一方、中国人は普通肉の摂取量が多く、肉の種類も料理法もさまざま、揚げた豚肉、焼いた羊肉、しゃぶしゃぶ…などたくさんあります。

食事の際の箸の並べ方や、腕を食卓の上に乗せてはいけないこと、自分の分は残さず食べることなどいろいろ中国と違うマナーがありました。気がつかないうちについ失敗することもありました。



3 異なる性格

高知県に滞在中、ボウリングに行ったことがあります。宿舎から歩いて15分ぐらいのところでした。案内役の山中さんたちと一緒に出発しましたが、途中で気づくと、旗を持ってせかせか歩いている山中さんは私たちの前100メートルぐらいを歩いており、一方、私たちは笑い、話し、大騒ぎしながら、ずいぶん遅れてのんびり歩いていたのでした。山中さんだけでなく、ほとんどの日本人はそそくさと街を歩いていました。デパートのエスカレーターを駆け上ったり、降りたりする人もよく見られます。のんびりしている中国人に比べて、日本人はせっかちなあと実感しました。

生徒の恋愛観にも差があります。座談会で中国では中学生や高校生の恋愛は「早恋」とされ、学校や父兄から禁止されていると聞いてびっくりしている日本人を見て、こっちの方がかえって驚きました。日本では小学生の恋愛でも学校も父兄も平気なのだそうです。国の生活条件、歴史、環境によって文化は違うものです。

日本での研修を通じて、中日両国の友好のため、また相互の文化理解のため、私も何かしたいと思うようになりました。それは帰国後の仕事において生徒たちに日本語という知識を教えるだけでなく、日本文化への生徒の関心、熱意、情熱を喚起し、異質な文化に対する柔軟な姿勢や寛容な態度を身に付けさせていきたいということです。

最後になりましたが、今回の貴重なチャンスを与えてくれた国際協力機構と日本でお世話になった方々に心から感謝するとともに、研修で得た成果をいつまでも大事にしたいと思っています。

日本への研修旅行

吉林省 梅河口市第二中学 成 基南

23 日間に及ぶ訪日研修活動は終わりました。ほんの 23 日間でしたが、いろいろな経験があつてたいへんいい勉強になりました。

今度の訪問は JICA（独立行政法人国際協力機構）が実施している交流事業の一環で、中国の各中学校、高校、大学で日本語を教えている中国青年教師が対象です。私たちは共通プログラム、分野別の東京プログラムと地方プログラムなどを通して、日本及び日本人に対する理解を一層深めました。

2 日間の北京での活動を終えた後、私たちは 11 月 26 日、東京研修のため飛行機で東京に着きました。飛行機に乗るのは今度が初めてです。

東京国際センターに着いたのは、もう暗くなるころでした。途中、私たちは緑に囲まれた町の様子、人々のまじめな仕事ぶりなどを車中から目にしました。私が泊まった宿舎は高級ではありませんでしたが、とても綺麗でした。私たちは、まずここで人に対する親切や日本の清潔な生活を実感しました。

一、綺麗な日本

私が泊まったところは、あまり広くありませんでした。しかし、どこにもほこりなんかはなかったのです。雨の日に町を歩いても、靴はやはり綺麗なままでした。東京でも高知でも、どこに行っても道端にはもちろん、狭い庭でも木や綺麗な花が植えてあります。ゴミも、燃えるゴミと燃えないゴミをちゃんと分けて捨てます。どこに行っても自然を守っていこうとする日本人の気持ちを読み取ることができます。国民のこのような協力があつたからこそ今日の綺麗な日本があるのではありませんか。今後私たちは中国の自然環境の問題により力を注がなければならないと思いました。

二、秩序のある日本

ある日、見学先から戻る途中、10 分程度の休憩がありました。みんな手洗いに行きましたが、そこでは先を争う人はおらず、みんな並んで整然と秩序を守っていました。バスも電車も込むには込んでいますが、先を争って乗ったり、降りたりする人はほとんど見られませんでした。空港の待合室や地下鉄の中、デパートの中など人がたくさん集まっているところでは小声で話している人は見かけますが、全体的にとっても静かで、そこが公共空間だとは信じられないほどでした。同じ状況でも中国では全く違った様子かもしれません。

日本人は他人に迷惑をかけようとはしません。いつも思いやりの心を持って行動するのが日本人なのだと思います。

三、 日本の学校

私たちは、国際交流基金日本語国際センター、早稲田大学、国際善隣学院、埼玉県立伊那学園高校、インターカルト日本語学校、一宮東小学校、明德義塾中高等学校、西高等学校などを見学し、図書館、コンピューター・ルーム、音楽室、体育室などの設備も見て回りました。また、留学生の受け入れについての説明も受けました。また、そこから日本の先生たちがどのような教え方をしているかが分かることもありました。これらはいずれも私たち日本語教師にとって今後役に立つ見学で、良かったと思います。

そして交流の点でも、お互いに中国と日本の文化、両国の教育方法や風俗習慣の違い、それぞれの伝統文化などまでいろいろ語り合い、有意義に行えたと思います。特に次のようなことが印象に残りました。

まず日本と中国の生徒の学習時間の長さが違うと思います。中国の生徒たちは受験科目だけを勉強し、クラブ活動の時間は少なくなっています。反対に日本の生徒たちはいろいろな課外活動があります。第二に、中国も日本もクラス単位で教育を行っており、生徒たちは知識を身につけやすく、教師にとっても教えやすいと思います。

四、 忘れられないホームステイ

楽しみにしていたホームステイの日が来ました。私が行く家庭のホスト・マザーは西岡忍さんという五十前後の主婦の方で、その一家は5人家族です。その夜、私を歓迎するため、お父さんと娘さんも家に早く帰ってきました。私たちはおいしい料理を食べながら、いろいろ話をしました。娘さんは性格がとても明るく活発でした。私はその娘さんと仲の良い友達になりました。

次の日、私はお母さん、娘さんと一緒に茶道の見学に行きました。お母さんはそこで茶道を学んでいます。お茶の点て方は大変複雑だと思いましたが、とてもおもしろく感じました。そこではお母さんのお茶の点て方を拝見したり、味わったりして楽しく過ごしました。

お茶についてはテキストやテレビを通じ、多少の見聞はあったものの、このとき初めて体で学ぶことができたように思います。日本の文化・風俗に対し、今後一層関心がわくような気がします。

さらにその翌日、私はお父さん、娘さんと一緒に桂浜水族館へ遊びに行きました。水族館には名前が読めない魚がたくさんいました。

今回のホームステイは2泊3日の短い時間でしたが、もともと全く見ず知らずの関係で、国も異なる私たちが、まるで一つの家族となったかのようなようでした。ホームステイ先を離れる時、家族と別れるのが辛くて、抱き合って涙を流した時の光景が、今も私の脳裏に焼きついています。

終わりに中日友好が永遠に続いていくことを祈っています。

報 告 書

遼寧省 瀋陽市朝鮮族第一中学 趙 海淑

時間が経つのは早いもので、あっという間に私たち青年海外協力隊日本語教師グループは日本での23日間の研修旅行に終止符を打ち、国へ帰ってきました。今回の研修旅行を通して、私は大勢の日本人と触れ合い、ありのままの日本の社会、日本の文化をより深く、より詳しく知ることができました。今まで私が知っていた日本は、ただ本やテレビなどで見聞きしたことだけでしたが、今回自分の目で見、肌で感じることで本当によかったと思います。日本でいろいろ体験したことはこれからの日本語の教育にもきっと役に立つと思います。

日本はきれいな環境と美味しい空気に恵まれた国でした。ずっと前から日本は町がきれいで空気は美味しいと聞いていましたが、まさか噂ほどではあるまいと思っていました。しかし、今回実際に行ってみたら、全く聞いていたとおりで、びっくりさせられました。

ある日、時間的にゆとりがあつて、一緒に来日した同僚たちと日本で一番物価が高いという銀座を回ることができました。残念ながらその日は空が暗く、雨も降っていて、ズボンのすそはすっかり濡れてしまいました。でも雨のおかげで午後3時ごろに街灯がとまり、昼なのに銀座の夜景を体験することができました。とても眺めがいいので、私たちは雨にもかかわらず、写真を撮たくさん撮って帰りました。

翌日、起きて驚かされました。昨日雨に濡れたズボンは、何のしみも斑もなく、きれいに乾いていました。そして雨で町が一層きれいになって、空気はもちろん、木の葉ももっとみずみずしくなっているように見えました。もし中国だったら、どうでしょう。ズボンが泥のしみで点々となるのはいうまでもなく、道を歩いているときも、常に汚れないように気をつけなければならないのです。

日本の家は殆んどが二階建てで、家々に小さな庭があり、庭ごとに木や花が植えられていました。聞くところによると、自分で植えたのではなく、造園の専門の人を呼んで植えさせるそうです。それから日本はごみを捨てていい曜日と時間がちゃんと決まっています。曜日ごとに捨てられるごみの種類も決まっています。そのため各家庭では燃えるごみと燃えないごみをちゃんと分けて、決まった日に捨てています。

そこには、日本の国民全体がきれいな環境を守るために、できるかぎり自分の力を尽くし、協力しあっていることが見て取れます。そういう国民だからこそ、日本はこんなにきれいな環境と美味しい空気に恵まれているのではないかと思われました。

日本は礼儀正しい国です。日本人は文明的で公衆マナーをきちんと守ります。そして周りの人に迷惑を掛けまいとする意識が強いです。日本の空港の待合室や、地下鉄の中、JRの中など、人のたくさん集まる場所では、口喧嘩どころか、大声で喋ったり、騒いだりすることも見られません。よく目にするのは、新聞を読んだり目を閉じて休んだりする人

です。また日本人はデパートや地下鉄など公的な場所で順番を待つときは列を作るのが普通です。またエスカレーターでは誰もがごく自然に左側に立って、先を急ぐ人のために右側をあけています。公衆便所でも長い列を作って一番前に立っている人が一番先に出てきたところに入れるようにしています。また赤信号の前では必ず足を止めます。先進国であつてこそ、こうなるのではないかと思われました。

上で述べたように、日本は本当にいい国です。河口湖での合宿も、いろんな学校の見学も、歌舞伎も面白くてよかったです。しかしもし誰かに「日本で一番忘れられなかったことは何ですか」と聞かれたら、私は高知県でのホームステイだと答えます。

私のホストファミリーは年が71歳のお父さんと68歳のお母さんでした。実際に会うまでは「家族の人に気に入ってもらえるだろうか、外国なまりの言葉でコミュニケーションがうまくできるだろうか」といろいろ心配になったし、とても緊張していました。ところが、紹介してもらいやいなやそういう心配はなくなり、すぐにリラックスできました。初対面なのに、なぜか親しみを覚えたからです。

あとで分かったことですが、私のホスト・マザーは中国に特に興味を持っていて17回も訪中経験があり、今も中国語を勉強しているとのことで、本当にびっくりしました。ホストファミリー宅での二日目の夜、運よくホスト・マザーといっしょに中国語を勉強している人たちを訪ねることができました。その方たちは中国人の私が来ているということを知っていて、会いたがっているとのことでした。女性も男性もいましたが、多くは年配の方でした。中国の何にでも興味があり、好奇心のある方ばかりでした。まず、自己紹介から始まりましたが、みんな中国語で正しく紹介しようとしてくれました。もう高齢なのに一生懸命頑張っておられる姿を見て、とても感心させられました。

その日は中国のことについていろいろ聞かれ、私の日本語も生かすことができました。うまくできたとは言えないかもしれませんが、コミュニケーションは上手にとることができたと思います。とにかくすごく印象的な夜でした。

また安芸市の市長に会わせていただいたし、昔の野良時計、書道美術館、マラソン大会、日曜の市場など、いろんな場所を見学させていただき、お土産も買っていただきました。鍋を囲んだ夕食もとても美味しかったです。

2泊3日のホームステイはすぐに過ぎ、あっという間に別れのときがやってきました。別れ際には思わず涙がでてきました。ホストファミリーも名残り惜しいらしく、涙を流していました。ホストファミリーとの生活は束の間でしたが、楽しくて本当に自分の家のようでした。

ホームステイを通じて、私は日本の普通の家庭、普通の日本人、ひいては日本の庶民文化への理解を深めることができました。これは一生忘れられないと思います。

最後に今回日本を見学させてくださったJICAをはじめ、いろんな関係機関の方々に心から感謝申し上げます。中日友好関係がいつまでも続いていくことをお祈りします。

私の訪日体験記

内モンゴル自治区 内モンゴル民族高等専門学校外国語学部 金花

待ちに待った日本研修の夢が実現しようとしていました。

科学技術部で出国手続きを済ませたあと、私は胸をわくわくさせながら自分の荷物を整理していました。時間がちょっと短いけれどもその23日間の訪問を大事にし、日本の風俗習慣、文化、芸術、地理、環境、歴史、社会などの状況を理解し、日本人の仕事に取り組む姿勢、つまり職業精神を勉強するつもりでした。

2003年11月24日、全国20人の日本語教師は北京に集まりました。そこでJICAは今度の活動について私たちに説明し、出国手続きを確認してくれました。その中でJICA中国事務所の真面目な仕事ぶりや態度を感じました。

2003年11月26日、私は飛行機の上で日本についていろいろな考えを持ち(たとえば、日本はどんなに発達し、東京はどんなにきれいで、日本人はどんなに優しいかなと思いがら)美しい夢の中で東京に着きました。しかし、表面上は思ったより普通の国でした。

私たち日本語教師団は、始めにJICA本部とその中にあるJOCV事務局を訪問しました。そこでJICAが日本国政府の実行する開発援助(ODA)のうちの主に技術協力方面の仕事を執行していることを理解しました。青年招聘事業も日本国政府開発援助の一つです。最近、中国の経済が発展しているので、日本は将来、支援の重点を基礎施設の建設から環境保護や人材育成へ変えていくとのことでした。

また、江戸東京博物館を見学し、古代日本人の生活方式や宗教習慣及び歴史遺跡などを理解しました。続いて国際善隣学院、国際交流基金会日本語センター、埼玉県伊奈学園総合高校(中国語教育)、インターカルト日本語学校などを訪問し、日本語教授法についてお互いに意見を交換しました。

最も私が感じ入ったのは、日本の先生たちが授業をやる時、学生たちに気楽で面白い学習環境を創造してあげようとする事、同時に学生たちの積極性を引き出して彼らの想像力と創造力を掘り起こそうとしていることでした。

わが国も改革開放と経済発展及び将来の国際競争に備え、創造力ある人材が必要です。私たちは日本の教授法を私たちの実験例として参考にできたわけです。また私をびっくりさせたのは、日本でとても多くの学生が中国語を勉強し、中国に深い興味を持っていたことです。これは改革開放後に中国経済が発展し、国際的地位が高まり、各国の人々が中国を理解しようとしていることを表しています。

教育機構以外にも東芝の府中事業所を見学しました、その企業は大きくて、進んだ科学技術を使っていて、確かに評判と実際とが一致している多国籍企業だと思いました。

また私たちは山梨県富士河口湖畔の合宿セミナーに参加し、日本の青年と一緒に体育交流やパーティーを行い、いろいろな話をしました。長い日本語教育経験を持つ日本の先生

の講演を聞き、その後お互いに意見を交わしました。合宿セミナー活動中、私はいろいろな日本語教授法を勉強しただけでなく、会話レベルも向上させました。同時に日本青年の骨身を惜しまず研鑽する精神や必ず時間を守る習慣、さらに競争意識などを身に染みて理解しました。

東京での13日間の活動を通じ、日本に着いたばかりのころと日本に対する感覚が次第に変わっていきました。日本は単に産業の発達した国ではなく、同時に非常に文明的な国でした。東京では痰を吐くことや、がやがや騒ぐことなどが全くありません。どんな店に入っても「いらっしゃいませ」と丁寧な言葉が聞こえてきます。またどんな店でも安心して買い物ができます。偽物がないから。エレベーターでも行列を守り、電車でもお互いに席を譲りあいます。

日本は交通も非常に発達し、便利です。日本の生活は非常に安全だと感じます。生活のみならず仕事をするにもとても便利です。私たちは日本人の高度な資質や強い環境保護意識などを勉強する値打ちがあると感じました。日本人はごみをいくつかの種類に分けて処理します。これは廃品の再利用率を高める上、環境保護にも役立ちます。

ところが一方、日本で生活すると、一種の緊迫感やストレスが生まれるようになります。ですから日本人は非常に疲れているようなのですが、それでもきちんと引き締まっているなど感じられるのです。

私たちの活動の最後は高知県での地方プログラムでした。初めに県知事を訪問しました。また高知希望工程基金会の代表、前田正也様は私たちに二人の日本の歴史上の人物——ジョン万次郎と坂本竜馬を紹介してくれました。彼らが生きていた当時の日本は、外国との関係をほとんど持たず、外国人を追い払っていたため世界文明から遅れていました。そんな中、二人は日本の将来のために知恵を絞って世界文明と進んだ科学技術を国民に紹介しました。いずれも日本近代史上とても偉大な人物です。私は帰国前に高知で坂本竜馬の塑像を買いました。今、その塑像は私の本棚の上に置いてあります。こんな偉い人がもう一回誕生することを望んでいます。

続いて、私たちは明德義塾中学校、高知県立高知西高校及び高知市立一宮東小学校を見学し、高知市立一宮東小学校では先生をする楽しさを体験しました。また葉山村教委を訪問して、中学、高校及び小学校の先生たちとお互いに意見を交換しました。日本の一部の中学校はきわめて国際的な学校経営をしています。たとえば明德義塾中学校はオーストラリア、カナダ、ニュージーランド、韓国、中国等海外23カ所の学校と友好関係を持っています。こんな手法は日本語を世界中に広める上でも効果的だし、ほかの国の進んだ文化や多角的な文化を受け入れるにも有利だと思います。

続いて3日間のホームステイです。ホームステイの当初は文化や習慣の違う日本の家庭で本当にやっていけるか、本当に最後までやり通すことができるかと不安でいっぱいでした。でも私の出会った家庭はとても優しい人たちばかりでした。私を迎えに来たのは杉山加奈子様でした。彼女とご主人はいずれも学習塾の先生で、3人の子供と1人の年老いたお母さんと一緒に暮らしています。杉山先生はどんなに忙しくてもボランティアとして毎日福祉センターへ行き、お年寄りの世話をしています。杉山先生は私を連れて高知市の高

知城や、五台山竹林寺や、桂浜水族館などいろいろなところを見学させてくれ、おにぎりや、お茶などたくさん料理をご馳走してくれました。とても楽しかったです。どうもありがとうございました。杉山先生から日本人の優しさや真面目で勤勉な一面を理解しました。

高知市も高知人同様、非常に美しい都市でした。都市の中に山も川もあり、太平洋にも面していて、とてもきれいでした。高知人も優しく、また日中友好事業のために努力している人が沢山います。前述の前田正也様は中国の青海省と安徽省に希望小学校を建設したり、児童図書センターを開設したり、危険校舎を修復したり、貧困家庭児童の就学支援をしたり、また沢山のボランティア日本語教師や児童図書管理員を派遣したりしている素晴らしい人です。

高知市と高知人は私に一番美しい印象を残しました。

今度の訪問を通じて、私の体験は豊富になり、日本語のレベルも高めることができました。私はこの訪問で目にし、聞き、思い、身に付けたことをこれからの教育の仕事に生かし、応用するつもりです。私の学生たちに日本の民俗、文化や社会状況などをよく理解させ、彼らの興味を引き出して、できるかぎり将来の中日友好事業の発展に役に立てるようにします。

私は中日友好が永遠に変わらず、とこしえに栄えることを心から望んでいます。

日本訪問の感想

吉林省 吉林市朝鮮族中学校 金 容蘭

今回私は幸いなことに中国科学技術部の推薦をいただき、日本語教師訪問団のメンバーとして、文明的で進んだ国である日本を訪問することができました。美しい自然景観とその特色ある文化で世界に知られる日本へ行き、直接日本人の皆さんと話し合いができて、とても楽しかったです。

日本へ出発する前に北京の中日青年交流中心で3日間の短期説明会がありました。その説明会で一番印象深かった方はJICA中国事務所の位坂先生でした。位坂先生の分かりやすく、上手な中国語にみんな驚かされました。先生の説明はユーモアたっぷりで、「普通の日本人と日本」というスピーチを聞いて感心しました。おかげでとてもわくわくした気持ちで日本に着きました。日本滞在中のスケジュールは東京地区と高知県の2カ所になっていました。初めての日本訪問なので、異なる生活習慣、文化背景、飲食などの面で当初は不慣れでとても困ったのですが、八島先生と2人の世話役の方のおかげで、すぐ新しい環境に慣れることができました。

東京にいる間、私たちは各界人士との交流を通して「日本国と日本」「日本戦後発展史」について、今まで以上に理解するようになりました。また、数カ所の学校見学を通して、日本の学生達の勉強の様子、暮らし方、試験制度なども少しずつ知るようになりました。歌舞伎の観賞もとてもいい勉強になりました。

12月5日からの河口湖での音楽会やスポーツ大会など日本の友達との楽しい活動を通して、自分の日本語会話力を高めることができました。また4つのグループに分かれて中国における「日本語教育の現状」について意見を交換しました。交流は5時間も続きましたが、誰もが疲れを感じなかったと言っていました。

12月9日、スケジュールどおり今度の訪問の主な目的地の一つ、高知へ向かいました。高知で一番初めの見学先は明德義塾高校でした。青い山を背にいろいろな設備のそろっている学校でした。そこでは体験型プログラムがあり、日本語の勉強のほか音楽科、英語科、歴史科も日本の生徒達と一緒に勉強したので、日本語がみるみる上達したと思います。勉強以外では寮での生活体験も楽しかったです。休み時間に生徒達とバスケットボールや水泳をし、夢を実現するためにがんばっている日本の高校生の姿も見ることができて、とてもよかったです。

今回の日本体験で、私が一番深く感じたことは日本人が信用を守ろうとすることです。ある宿泊先のホテルの従業員が私の荷物を運んだ時、運び方が悪くて日本人からもらったプレゼントを壊されてしまいました。私は大丈夫だと何回も言いましたが、そのホテルの社長はそのプレゼントの産地を調べてからボーイを飛行機で現地へ派遣し、まったく同じものを買ってきてくれました。そのことから日本人が信用を守るという話は決して

嘘ではないと初めて分かりました。

今度の訪問では、ホームステイが一番印象的でした。高知に着いて4日目、私たちはそれぞれホストファミリーのお宅へ行きました。実際に行く前はその夜どうしたらいいか、どう交流したらよいか分からず、不安でいっぱいでした。ところがホストファミリーの皆様の優しい言葉といろいろな気配りで、その不安はすぐどこかに吹き飛ばしてしまいました。おじいさんとおばあさんは中国語を習っていて、とても真面目に勉強していました。いつもノートとペンを持って出かけ、見たこと、聞いたことをメモして帰ってはまた練習します。発音が上手にできないので、毎日テープを聞いたり、単語を読んだりして、発音が正しくなるまで頑張ります。おじいさんとおばあさんはそればかりでなく、茶道や生け花にも参加します。短い2日間でしたが、おじいさんとおばあさんを通して私は優しい日本人、勉強好きな日本人を見ることができたのです。日本のおじいさん、おばあさん、どうもありがとうございました。

1ヶ月の訪問はいつのまにか過ぎてしまいました。短いながら本当に深く心に残る日々でした。文明的な国、勤勉な民族、勉強好きなおじいさんとおばあさん、やさしい先生など…。

日本について

吉林省 鎮萊県第一中学 張 茹

帰国してから、もう半月くらい経ちました。でも日本で見たことは今もはっきり目に浮かびます。昨日のことのようです。当時の日々を思い出して何時間もずっと座っていた時もあります。ただ、帰国当初はまだ思い出が十分整理できず、どうしても報告書を書くことができませんでした。そこで今日になってようやく筆を手を執っています。

一、私の目で見えた日本

(1) 美しい島国、素晴らしい人々

日本は山がたくさんある島国です。火山の爆発、地震、台風など自然災害もしばしば起こります。ですから自然環境は決してよくないだろうと思います。でも厳しい自然環境の中で生きる日本人は、とても美しい環境をつくりました。

大勢の人が集まっている東京でも、空気は新鮮で町もきれいです。並木の葉にほこりがたまっていません。なぜなら日本人は環境を守るという意識がかなり強いからだだと思います。例えば道は車でとても混んでいますが、排気ガスはかなり少なく、騒音もあまり大きくありません。そしてどの車もちゃんと交通規則を守っています。

またゴミ処理についてもそうです。日本では日常のごみは4つの種類に分かれています。日本人は規定どおりにちゃんとゴミをそれぞれのゴミ箱に捨てます。ゴミの回収も日付によって違います。とても便利です。他人に迷惑をかけないという意識を持っているからこそ、一人一人がちゃんと規則を守り、いい生活習慣が形成されたのでしょう。

(2) 発達した経済、国際的な教育

よく知られているように、日本は資源もとても乏しく、国土の面積も小さいです。たくさんの物を外国から輸入しなければなりません。近代では戦争によって甚大な被害にもありました。でも日本はわずか30~40年ほどで先進国の仲間入りをしました。精密な電子製品、世界でも最も高品質の自動車、国民の豊かな生活、経済的格差のない都会と農村、それら全てに私はたいへん驚きました。このようなことはとても不思議だと思いました。

ある日本人の話によると、日本人は運のいい国民だそうです。でも私の考えでは、これは日本人が勤勉に仕事をした成果です。また経済の発展は国民教育と密接に関係があります。日本人は進んだ教育理念を持っています。国際的な教育が実践されています。大都会から離れた高知県でも、明德義塾という高校では校門に5つの国の国旗が立てられています。他の国の長所を学んで自国の発展に結びつけたことが、日本の急速な発展の要因ではないかと思います。

二、私の感想

(1) 中日両国の関係について

飛行機に乗って3時間ぐらいで日本に着きました。日本は中国の隣国だということを実感しました。そして、日本ではどこにでも漢字があります。とても親近感がわきました。日本人は中国人と同じ習慣をたくさん持っています。中日友好はこれほどいい要素を持っているのです。ところが、私が大勢の日本人に聞いたところ、大部分の日本人は現代の中国についてあまり知りませんでした。中国語を教えている大学の先生の理解度でさえ、中国人には納得できないものでした。中日両国の国民はもっとお互いに交流する必要があります。お互いに理解しさえすれば、友好関係を持つことができると思います。特に青年は両国の友好に自分の力を尽くさなければなりません。

(2) 日本の未来について

今の日本の発達の影響にはいろいろな社会問題が隠れています。生活リズムが速くなるにつれ、社会の圧力も強まりました。自殺する若者もますます多くなってきました。家庭内暴力も多くなりました。テレビのニュースでは、ある父親が娘に対し電流を使って虐待していたそうです。これは残酷すぎると思います。生活条件が改善されたおかげで人間の寿命が長くなり、お年寄りの数が増えました。一方、若い世代、特に女性は結婚年齢がますます遅くなりました。独身の人がたくさんいます。子供も少なくなりました。教育費が高くなり、親の負担はたいへんです。でも子供は勉強嫌いになってきました。いろいろな社会問題に直面し、日本は今後どうしたらいいのでしょうか。他国に学び、友好関係を維持し、世界平和をいちばん大切なこととして自国の経済を発展させなければならないと思います。

訪日研修報告書

江西省 江西旅遊商貿職業学院外事弁公室 龍 婷

独立行政法人国際協力機構の招聘を受け、中国科技部中日技術協力センターの念入りな組織計画により、白楊団長以下中国青年日本語教師団一行 20 人は、2003 年 11 月 26 日から 12 月 18 日までの 23 日間、友好訪問のため日本へ赴いた。私は幸いにもそのメンバーの 1 人としてこの忘れがたい有意義な活動に参加することができた。

日本の政治、社会、経済、科学技術、文化など様々な分野、並びに自然景観の全貌をつかみ、理解するには 23 日間はあまりに短かった。しかし効率を追求する仕事のテンポの速さ、自然と文化の素晴らしく精巧な融合、謙虚で友好的で親切な人への接し方等を見聞し、また身をもって体験し、現代化のレベルを感じるには十分であった。これはまた、私自身この機会に日本を知り、より身近に感じたいと思っていたことであった。

訪日中、日本人と接する度に彼らはみな私に向かって同じ質問をしてきた。「日本の印象はどうですか」と。環境が良く、空気がきれいで、交通の便が発達していること、また日本人は謙虚で、時間に正確で、仕事の態度にいささかもおろそかな点がないことなどに最も深い印象を与えられたと、私は聞かれる度に話す必要があった。

日本を身近に感じ、日本を理解し、日本を見て、日本に学び、日中両国の友好交流の促進を一步でも進めること、それが私たちのこの訪日活動の目的であった。これは私たちの訪日前説明会で日中双方の関係者が強調していたことの一つである。

今回の訪問で日本人の心のこもった友好的な接待を受け、私たちは青年海外協力隊事務局や国際交流基金日本語国際センター、国際善隣学院、早稲田大学日本語国際センター、凡人社、埼玉県立伊奈学園総合高等学校、国際キリスト教大学、明德義塾高校等を相次いで訪問参観した。また私たちは歴史や文化知識の講座に耳を傾け、日本の青年や日本語教師と多くの研究討論会を行ない、民間の活動にも参加し、日本人家庭の生活を体験した。

この一連の社会体験を通して、日本の文化活動に感銘を受け、日本の文化教育の状況をよりいっそう理解することができた。自分の日本語会話表現能力も訓練し、高め、日本や日本人に対する良い印象もより深まった。同時に日本の先進的な教育や文化を学んだことで私の未来の教育活動にもとても有益なものとなった。

こうした学校訪問と日本語教師や青年たちとの交流を通して、私は以下に述べる 5 つの方面で日本の教育に深い感銘を受けた。

1. 個人を基本とする教育理念の十分な体現

例 1) 小中学校からスタートする学生重視の心の健康教育。学校や教師が学生を尊重し、病気の学生や教育を受けたくない学生、放課後すぐに家へ帰れない学生たちに対し十分なケアをしていること。

例2) 学校での規則や建築設計において、一人一人の教育に十分に考慮し、体に障害のある児童にも良い教育を受けることができるようにしている環境作り。

2. 自主自立能力の養成、模範教育の手がかりの明示

例1) ある学科の授業では、学生自身で情報を集め、インターネットのページを作っており、教師はアドバイス役に徹していたため、教室の雰囲気は非常に活発であった。これにより一人ひとりの学生が主体的に関心を持ち、自分の能力を表現させていた。

3. 政府の教育重視策、社会の教育への関与、家庭の教育に対する強い関心

学校の建設と計画を都市計画の重点に置いていること。集合住宅地区の公益地に学校建設の有益性を結び付けて考え、一体化させ、学校と集合住宅地区の相互交流を形成している。例えば小中学校は運動場、体育館、プール、図書館を建設し、学校教育活動を除き、当該地区住民に施設を開放し、教育資源を有効に利用し、地区住民の継続的教育のために場所を提供することを十分に考慮している。学校は教育を行なう上でその地区にいる人的資源を十分に利用し、展開している。

例えば、体育、美術、音楽、外国語、カウンセリングなど学内で不足している人材を補っている。学校は家庭との交流を重視し、家庭からの意見や提案を聞き入れている。保護者は学校の仕事を理解し、支持している。子供たちへの教育を最も重要なことだと考え、学生に間違った点があれば、保護者は学校に「お手数をお掛けします」「申し訳ございません」「よろしくお願ひします」と謝る。これは教育上の良好な雰囲気を表している。

4. 高度な環境保護意識

私たちの訪問先は大学、高校、中学、小学校を問わず全て衛生が行き届いており、学内の様々な衛生施設や構内の緑化は、教師や学生の環境保護意識や学校という場の教育理念を反映している。例えば校内に入るときには必ず学校統一の靴に履き替えなければならないことやごみを分別して捨てなくてはならないことなどが挙げられる。

5. 友好・礼儀は学生たちの道徳水準を体現

訪日期間中、受け入れてくれた学校の先生の歓迎や友好的な接待を受けたが、代表団が参観中に教師や学生に出会うと、彼らはみな「こんにちは」と挨拶をしてきた。社交の場では礼儀があり、各自が仕事上、時間の概念を大事にし、学生には十分な教養を身につけさせている。

しかし、日本の基礎教育の管理体制は競争機能が足りないと思われる。例えば、学校の運営レベルにおいては評価体系を測るものがない。教師の教育内容に対する評価基準もなければ職階級制度もないこと等が挙げられる。

今回の訪問は時間が限られていたが、私たちは日本の教育概況を理解し、日本及び日本人を認識し、視野を広め、知識を学び、収穫もたくさん得ることができた。

訪日報告書

湖北省 三峡大学外国語学院 游 凌

日本国際協力機構（JICA）の招聘を受け、2003年11月24日から12月18日までの2003年度青年招聘第17陣「中国日本語教師訪日団」に参加した。この訪日の旅は23日間と短かったものの、この目で見て、肌で感じることで、日本の政治、経済、文化、科学技術及び自然風景の全貌について初めて知ることができた。今回の訪問は両国若者間の相互理解を深め、我々日本語教師の視野を広め、今後の日本語教育の上で大切な財産になった。訪問を通して相互交流、相互理解という目的を達することができたと思っている。

今回の活動は二つの部分を含んでいた。それは北京での活動と日本での活動である。いずれも活動内容が豊富で、充実していた。2日間の北京プログラムは主にJICA中国事務所による紹介だった。日本でのスケジュール及び注意事項の説明、また北京外国語大学内の北京日本学研究中心を参観できたおかげで我々は中国の日本語教育の現状と今後の発展について理解、学習できた。日本での活動は東京部分と高知部分に分けられていた。東京部分は主に大学日本語教育と留学生別科教育の参観、それに河口湖での合宿セミナーであった。高知部分は主に小中学校の日本語と中国語の教育現場の見学、それにホームステイであった。そのほか、いくつかの講座、歌舞伎、新幹線利用体験などを通して、いろいろな角度から日本理解の機会を与えてくれた。

私の日本に対する諸方面の印象は主に以下のとおりである。

1. 環境

日本の印象としてまず頭の中に浮かんでくるのは、やはり清潔な環境と澄んだ空気、整然とした交通、80%以上の国土が森林で覆われており、公共施設が完備されているということである。実際、狭小な島国に身を置くという感じは全然なかった。東京にしても、高知にしても道路がきちんとして清潔であり、埃なんかはなかった。日本での23日間、一度も靴を磨かなかったが、これは国内では想像も及ばないことである。道にはもちろんどんなに狭い庭でも木や花が丹精込めて植えてある。それにどこの町でもいい加減に捨てられたタバコの吸殻が見られなかった。ゴミも、燃えるゴミ、燃えないゴミ、空缶をちゃんと分けて捨てることになっている。このように自然を大切に守るという意識は我々が学ぶに値することである。でも日本は至る所に車がたくさんあって、特に通勤ラッシュの時、とても交通渋滞しやすく、歩行が極困難である。

2. 国民の資質

北京での現地説明会から帰国前の説明会まで、日本国際協力機構はかゆい所に手が届く世話を下さった。各スケジュールの手配も時間、場所とも詳細に計画されており、我々

がそれについてよく分かるようになっていた。活動が円満に成功したのは彼らの苦心の手配と努力の賜物であった。

次に感心したのは日本人の交通意識が強いことである。青信号になる前に急いで道を渡る人は絶対いなかった。車が一台も走っていない場合でもそうである。人々は青信号になるまで辛抱強く待って、それから歩道を慌ただしく渡っていった。公共の場できちんと行列を作るとは日本人の長所で、エスカレーターでは誰もがごく自然に左側に立って先を急ぐ人のために右側を開け、人の流れが悪くなることを避ける。公共の場では喫煙区も設けられ、煙草を吸う人の姿はそこでしか見られない。公共の場では体に障害のある人と盲人用の設備も設けられている。電車や地下鉄では、特に妊婦、お年寄り用の優先席も設けられており、たとえ混雑していてもほとんど空いている。

3. 教育

教室の中はいつも生き生きとして活気的な雰囲気が満ちあふれ、先生たちは優しく熱心に学生を教えている。学生の個性を育て、問題を分析・解決する能力を育てることを目的とした教育モデルが今日の日本の教育の主流になっている。同時に三つの厳しい問題がある－基礎学習能力の低下、校内暴力、不登校－である。日本と比べ、中国の基礎教育の質的内容は少し高いように思う。しかし、中国の初等教育では負担軽減問題が出ている。もし両国の教育を中和できたらいいかもしれない。

この訪問の一番大きな成果はやはり今後の日本語コース設計上の啓発である。合宿セミナーの時、以下の問題について日本の先生たちと話し合った。日本語教科書、日本語教科書の選択と学生レベルとの関係、教育上の難点、作文の授業、学生の就職、言語中の文化的差異、日本留学などいろいろな意見を出し合った。それに中国国内の先生とも主に高学年のコース設置と教育法について意見を交わした。交流を通して、現在の日本語研究の動態を知ることができ、また将来の自分の日本語学習にもとても役立ったと思っている。

4. 感覚

合宿とホームステイの時、我々は日本人の優しさともてなし好きな点に感心させられた。ホームステイの2日目に、ホストファミリーは私を連れていろいろな所を案内し、根気よく詳細に説明して下さった。おそらくホームステイ先のホストファミリーは普段の仕事以上に苦勞したと思うが、私には大丈夫だと言ってくれた。食事の時、私の口に合わせるために、わさびなどの調味料も入れなかった。私は本当に涙が出るほど感動した。

一言で言えば、日本は先進国として我々が学び、手本とするに値することがたくさんあった。しかし同時に、少子化、学生の基礎学習能力の低下、男女の不平等、親戚・友人関係の希薄化、地域発展の不均衡、大都市への人口密集等いろいろな社会的な問題も存在している。我々が一緒に解決しなければならない問題である。

この訪問の旅は、私にとっていい勉強の機会となったと言える。私は日本と日本人に対し幅広い面から理解することができた。同時に私は中日両国の発展が新しい歴史の段階となり、中日両国が世代々友好関係を続けていくと深く信じている。

心に残った日々

遼寧省 遼寧中医学院 姜 丹

時間の経つのはほんとうに速いものである。知らず知らずのうちに、帰国してから既に一カ月近くが過ぎてしまった。しかし今でも、日本での日々が昨日のことにように思い出される。

日本へ来る前に、日本の伝統的な文化や、日本人のライフスタイルや日本人の考え方など、つまり「一体、日本はどんな国であろうか」ということはよく理解していなかった。そして、日本語にしても自分自身にしても、まだまだ未熟な所が多かった。しかし今回良いチャンスに恵まれて日本へ来ることができ、いろいろ素晴らしい経験があって、たいへんいい勉強になった。

次に今回の研修訪問についての感想を簡単に述べたい。

一、 日本に対する第一印象

中国にいる時、「日本はとてもきれいで清潔な国だ」という話をよく耳にした。しかし「百聞は一見にしかず」である。今までこの目で見たことがなかったから、ずっとこういうことが信じられずにいた。でも飛行機が日本の上空を飛んでいる時、そこから見た東京は確かに北京と全然違っていた。あちこち緑いっぱい、道路が整然としてすっきりした感じがする。町を歩くと、どこへ行っても木々の緑が映えている。赤い葉や黄色い葉が混じっていて、美しい花が咲いていて、まるで森林公園のような気がする。

二、 日本人の親切さ- 一番感動したこと

今回の日本行きは、私にとっては初めての外国だったから、ずっと不安な気持ちで一杯であった。しかし成田空港に着くと、その感じが全く変わった。どこでもにこにこした笑顔の人が目に映ってきた。空港の到着ホールの「お帰りなさい、Welcome to Japan」という大きな看板を見て、私はもう自分の家へ帰ったように感じ、落ち着かなかった気持ちを忘れてしまった。

「小さなことから大きなことがわかるようになる」。日本滞在中、私はこの文の意味をより深く理解することができるようになった。それは自修（自由行動）時のことであった。私は新宿のビックカメラへ買物に行きたかったのだが、あいにく新宿駅で道に迷ってしまった。駅構内はとても大きく、出口もいくつかあるから、矢印がちゃんと書いてあっても、どこへ行ったらいいかよくわからなかった。その時「すみません、ビックカメラへ行きたいんですが」と聞いてみると、駅員は思いやりを持ち、とても懇切丁寧に教えてくれた。私は相手の話を全部覚えられなかったため、同じ質問を何人かに繰り返した。すると

最後に道を聞かれた駅員は、私を目的地まで連れていってくれた。このことはほんとうに小さくて、小さくてつまらないことと感じられるかもしれないが、そこから、日本国民の高い資質と親切な態度を感じ取ることができた。

三、 環境保護意識の強さー 一番感心したこと

日本は小さな島国だが、人々には美しい自然環境をしっかりと守ろうとする意識がとても強く、どんなに狭い庭でも木や花が一杯植えてある。それにどこの町でも、勝手に捨てられたタバコの吸い殻とか、空き缶とかビニール袋は見られなかった。町を歩いても、勝手に痰を吐く人の姿を見かけることは全然なかった。特にゴミの捨て方は厳しく守られている。日本では、ゴミを捨ててもいい曜日と時間が決まっている。また燃えるゴミと燃えないゴミを種類ごとにちゃんと分けてから捨てている。ちょっと面倒くさいかもしれないが、そこから自然を愛し、守っている日本人の心を読み取ることができる。日本国民全体のこのような協力があるからこそ、今日の良好な環境と緑いっぱいの日本があるのではないだろうか。

四、 私にとって人生初体験の多さ

日本へ来てから、私は初めて歌舞伎を見、初めて花道を習い、初めて茶道を体験し、初めて新幹線に乗った。また初めて龍河洞のような鍾乳洞を冒険した。人生初めての体験が数え切れないほど多かった。それに初めてたくさんの日本人と出会った。そして日本人との交流を深めるにつれ、ありのままの日本、ありのままの日本人を知るようになった。今回の研修訪問で一番深く感じたことは、どの世界へ行っても、またそこの人々の考え方が自分のものとどんなに違っていても、同じ人間なのだから、お互いに理解し合い、世界中の人が仲良く友好的になって、素晴らしい世界を築いていかなければならないということである。

今回多くの経験をしてきたことで、今の自分はかなり成長したと思っている。これこそが今後の生活や仕事に大きく役立つと思う、日本の美しさ、日本人のいきいきした生活の様子、輝いている笑顔はいつまでも忘れられない。私は日本でのこれらの貴重な経験を一生の宝物にしようと思っている。

最後に言いたいのは、皆さんの知っているように、日本の硬貨の中には、五円(発音は「御縁」と同じである)がある。中国に戻った私の手元にはこの五円の硬貨だけが残っている。永遠の縁起物として大切に持っていようと思う。これは私と日本のご縁である。

とても簡単ですが、以上で終わらせていただきます。今回の研修機会を与えて下さった日本国際協力機構(JICA)ならびにお世話になった方々へ心より感謝の意を申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

いつまでもいっしょに

湖北省 黄崗師範学院 李 倫

23 日間は人生においてはほんの一瞬かもしれませんが、2003 年 11 月 26 日から 12 月 18 日の期間は、私にとって一生忘れられない記憶になったと思います。初めての日本での買い物、初めて入った温泉、初めて見た歌舞伎、初めての東京での講座と見学などが今でも昨日のこのように時々目の前に浮かんできます。

東京の道は狭くて、きれいです。これが私の受けた第一の印象です。

日本に入った時、飛行機から見た日本は緑がいっぱい、その緑が道路で細かく切り取られたようでした。空気はいつも雨の後のような澄んだ空気でした。東京、山梨、高知のいずれの場所でも毎朝 8 時頃出かけ夜 7 時頃戻り、こんなふうな 23 日間動き回って過ごしたにも関わらず、穿いていた靴は一度も磨かなくても穿いたばかりの時と同じぐらいきれいでした。

日本はきちんとルールを守る国だと思います。町を走る車がすごく多くて、渋滞はよく起こっているのに、道はさらに狭く見えます。でも赤信号を突き進む車は一台もないです。どんなに急いで道を歩いている人でも、青信号になるまでは待つことになっています。そしてお酒を飲んだ人は絶対運転してはいけません。飲酒運転は厳重に処罰されるはず。またエスカレーターに乗る時、人々は積極的に左側に立って、先を急ぐ人は右側を通ることが出来ます。本当に秩序整然としています。

短い滞在期間でしたが、日本人が何をするにも丁寧で熱心であると深く感じました。各スケジュールの手配も、時間・場所とも詳しく計画されており、実際に予定していた行事を予定と寸分違わず実行することが出来ます。特に面倒な作業を嫌がらず、日常生活の細かいところにも力を入れていることが好ましく感じられます。

宿泊先のホテルで、深く印象に残ったことがあります。一つはトイレです。様々なボタンを押すと自動で水や温風が出てくるものです。トイレもリラックスできる空間になっている点がおもしろいと思いました。二つ目はエレベーターが 2 種類になっていることです。片方は行動が不自由な人のために用意されているのです。また、燃えるゴミと燃えないゴミを捨てる場所が分かれていることも新鮮でした。

しかし、日本人はあまり本音で表現しません。いつも笑顔で人と交流します。相手の気持ちを思いやって、自分がやりたくないことでも直接は断らないです。このような人間関係を続けたら、あとで人間関係が大変にならないのでしょうか。

最後に、高知県でのホームステイについてお話ししたいです。

人見知りをする私にとってホームステイは不安でいっぱいでした。3 日間だけ何とか我慢しようという心構えでホストファミリーの山川さんご家族と対面しました。私の不安を乗せた車がいよいよ山川さんの家に着きました。すると玄関のところに「李さん、私の家へようこそ」と書いてあり、その瞬間、私はすごく感動するとともに、さっきまでの不安

がすっかりなくなりました。お母さんがにこにこしながら部屋を紹介してくれ、「自分の家にいるように楽しんでください」と言いました。

翌朝は寒かったけれど、家族と一緒に動物園へ行きました。その動物園には動物がいるだけではなくて、遊園地、レストラン、スーパーもあり、とても便利でした。可愛い猿は凄くサービス精神に富んでいて、客である私たちを楽しませてくれました。そして娘さんの華子さんと多くの写真を撮りました。

午後、お母さんが中国の餃子の作り方を勉強したいと言うので、私は家で皮を作って具を準備して、本場の餃子を作り始めました。2時間ぐらいで、やっと出来上がりました。皆初めてこんな餃子を食べたと言って、大変喜んでいました。私はちょっと疲れましたが、家族の喜んでる様子を見て満足しました。

夜、寝る支度をしながら、ふと最初の日から3日間だけ我慢しようと思ったことを思い出しました。明日でこの親切ないい家族と別れる。こんなに時間が早く経つとは思ってもありませんでした。「もう一日あればいいな」私はそう思うようになっていました。

翌日、私はホストファミリーと一緒にホテルへ行きました。夕食時、私たちは一緒に笑ったり話したりしながら食事しました。そうしている間についに別れの時間になりました。涙を流しながらまた会おうと約束しました。短いホームステイでしたが、日本人に対する先入観がなくなりました。私にこんな大切な、一生忘れられない経験をさせてくれた山川家の皆さんに心より感謝しています。

今回の訪日中、日本人との交流を通して、日本の風土、人情、風俗習慣について肌で感じる事ができたように思います。そして専門分野に関する理解もより一層深めることができました。これらのことは今後の私の教員生活に、実体験に基づく貴重な資料を与えてくれたと思います。

忘れられない合宿セミナーと高知の旅

寧夏回族自治区 寧夏大学外国語学院 王 剛

合宿セミナー

はじめに、中国における日本語教育について。

現在中国では、日本語を学ぶ学生より英語を学ぶ学生のほうがはるかに多く、しかも日本語を学ぶ学生はだんだん減ってきています。その原因として日本語の大学入学試験が難しくなっていることと、日本語が勉強できる大学が限られていることが挙げられます。そのような状況で日本語を学ぶ学生の多くは、日系企業への就職を目的にしています。その他では日本の文化に興味があるからなどの理由もあります。

日本語を学ぶ環境としては、中学、高校のうちから科目に含まれている場合もあり、学習開始時期には地域差があります。また中学、高校では日本語を受験目的で勉強する人がほとんどですが、大学では専門的に勉強する傾向があります。

現在中国で日本語を教える時、多くの先生が授業で工夫しているのは、生徒に分かりやすいように母国語と日本語を使い分けて説明すること、また発音は何度も繰り返して教えることなどでした。

これらについて話している中で、日本語の文法の難しさで話が盛り上がりました。

問題提起として、日本語には「主語」という概念はないのに、日本語の文法を教える時に「主語」という言葉を使って説明することがあります。

これは例えば「主語」という概念を持つ英語の文法を用いて日本語を教えていることになるのと同じことになるのではないかという疑問が出てきました。

これに対して、日本で教える日本語の文法と外国で教える日本語の文法では、その伝え方が異なるのではないかという意見が出ました。また言葉はその国の文化であると言われることから、他国の言葉を自分の国の文法にそのまま当てはめることは、どこかに無理が生まれることであり、それが言葉を伝える難しさにもなっているのではないかという意見も出ました。

これらのことから、日本語を教える上で難しいこととして、助詞や敬語、類義語の使い方が挙げられました。特に言葉のニュアンスの伝え方が難しく、これは学術的にも曖昧である部分が多いと言われていました。これらは語感を使うからこそ理解できることでもあり、これをどのようにして学生が理解できるように説明するかが日本語教師の課題であると思われれます。

また、お互いの経験や職場の現状を話し合う中で、日本と中国の恋愛事情についてグループ討議が中断するほど話が盛り上がりました。

中国では中学、高校での恋愛は基本的には禁止されていますが、最近ではひそかに恋愛する学生も増えているようです。

恋愛について、自由すぎるのもだめですが、厳しすぎるのもだめだろうと言うことで話しはまとまりましたが、グループ討議の後もこの話題で盛り上がったのは言うまでもありません。

忘れられない高知の旅

今回の日本語教師団の地方活動の場所は高知で、とてもいいところでした。私たちにとって、何より感じられたのは、高知の人々が持っているやさしさと美しい自然景観やおいしい土佐料理などでした。これらのおかげで、一週間の研修活動は楽しく進んで行きました。

日本語教師団ですから、日本の教育関係者との交流も今回の招聘事業の目的だと思います。高知でのスケジュールも十分その目的を達成していました。高知では二つの高校（明德義塾高等学校と西高等学校）、一つの小学校（一宮東小学校）と一つの教育委員会（葉山村教育委員会）を見学しました。私たちが訪ねた学校の生徒たちはみんな大変元気で、情熱を持って私たちを歓迎してくれました。小学校では生徒たちの楽器演奏を聞きました。小学生にもかかわらず、そんなに上手に演奏していたのには本当に感心しました。学校の先生たちと交流した時は、いろいろ積極的に話をし、いい交流ができました。

研修員の皆にとって、この招聘事業の各活動の中で、最も忘れられないのはホームステイです。短い2泊3日間でしたが、ホストファミリーの人々の笑顔や親切が心に沁み、自分も家族の一員になった気がしました。日本人の日常生活を体験することによって、日本人そのものもだんだん理解できるようになりました。

分かれる時、抱き合って涙を流した光景は、絶対みんなの心に残っていくでしょう。

私たちに一生忘れられない思い出を作ってくれた高知の皆様に心より感謝しております。

初めての日本体験

甘肅省 蘭州理工大学外国語学院 于 潔

2003年11月26日から12月18日まで、私は日本語教師として日本国際協力機構主催の海外青年招へい計画に参加し、日本で23日間の短期研修をしました。

外国語を専門とする者にとって、対象国に行って、その国の文化・生活方式など体験することができるのは一番うれしいことです。私も例外ではありません。日本へ行けば、自分の日本語の会話と聴力の能力を高められるだけでなく、日本への理解も深められると思いました。日本へ来る前、日本は経済発展した国で、アジアで唯一の先進国ですが、社会の秩序がよい代わりに人情が欠けている国だと思っていたのですが、帰ってから従来の印象が全部変わりました。日本の国民は中国人民に対して、いつも親切であたたかい気持ちを持っています。

さて、次は日本で見たこと聞いたことを書きます。

今回の研修内容は主に東京活動と高知活動に分けられていました。まず東京での活動について話したいのです。私たちは東京国際センターに泊まりました。このセンターは東京の幡ヶ谷に位置し、新宿まで近く、交通が便利です。センターにはたくさん他の国からの研修生がありますが、みんな大家族のように一緒に生活していました。

11月27日と28日、日本についての二つの講座を聞きました。それは「日本と日本人」と「戦後日本の歩み」でした。講座を通して、日本の歴史、現代社会と日本人に対する理解を深めることができました。たとえば高齢化・少子化などの社会問題、また現代日本の教育の「三大問題」、つまり基礎学習能力の低下、校内暴力、不登校があることなどです。私は日本の経済、特に戦後日本経済の発展に興味があるので、今回の講座はこれからの仕事にきっと役に立つはずで

東京で私たちは国際交流基金日本語国際センター、早稲田大学、国際善隣学院、埼玉県の伊奈学園高校などを見学しました。そこで図書館、コンピュータ室などの設備を見学しました。それに留学生の受け入れについても説明がありました。どんな条件で留学できるかが分かりました。そして授業を見学し、日本の先生がどのような教え方で教えているかがわかりました。私たち日本語の教師にとって、今後役に立つ見学でよかったです。

国際交流基金日本語国際センターには、日本語に関係がある世界中のあらゆる本と辞典が集められているそうです。もしこのセンターで2、3ヶ月研修ができれば、必ず大きな成果が得られると思います。残念なのはその応募手段が分からないことです。早稲田大学の留学生向け授業を見学し、留学生たちの上手な日本語に感心させられました。また凡人社も見学させていただきました。いい本がたくさんあり、参考になりましたが、価格が高くて買うことができませんでした。好きな本が手に入れないのは残念です。埼玉県の伊奈学園高校は中国語教育では日本で一番有名な学校です。その高校の学生は1年生から

中国語の学習を始めます。授業では2人の先生と一緒に中国語を教えていました。そんな条件は、中国とは比較にならないくらい恵まれています。

東京の活動の中で一番有意義だったのは河口湖での合宿活動です。3日間、日本の青年と一緒に同じ部屋に泊まり、同じ食事を取りました。そしてお互いに中国と日本の文化、社会、教育から風俗習慣の違いまでいろいろ話し合いました。とても有意義でした。その交流活動は両国青年の理解を深めただけでなく、われわれ日本教師にとってこれからの仕事にもきっと役に立つものです。

自由時間には、他の団員と一緒に市内見学をしました。東京のにぎやかな様子は言うまでもないことで、どこも人がいっぱいでしたが、それでも秩序が守られています。日本ではエレベーターに乗る時、皆左側に立っています。それは急ぐ人のために通路を開けているわけで、こうして秩序を守っています。小さなことから、日本人のことがわかります。デパートのショッピングも気楽です。店員のサービスはとてもよく、いつも丁寧な言葉や態度で客に対応してくれます。これは日本人の考え方の中にお客さんは「買ってやる」、店の人は「買ってもらう」という意識があるからです。

次に高知県について話します。高知県はとてもきれいなところです。私たちは主に高知市を見学しました。高知市は高知県の中央部、四国山脈を背景に太平洋に面した南国の都市です。高知県にはたくさんの偉人がいます。特に有名な人物はジョン万次郎と坂本龍馬です。私たちはここで中学、小学を見学したり、龍河洞を探検したりし、とても楽しかったです。そして12月12日の午後からホームステイが始まりました。私のホストファミリーは立花登等子という方で、50歳ぐらいです。私はいつも彼女のことを「お母さん」と呼びました。立花お母さんのご主人様は立花信之氏で、親切なご老人です。3日間、私は立花お母さん、また彼女の親戚の入谷家、山崎家の皆さんと一緒に映画を見たり、高知城、坂本龍馬の石像を参観したり、てんぷらなどを食べたり、いろいろ楽しく過ごしました。私は本当に感動しました。本当にありがとうございました。立花お母さん、そして入谷家、山崎家の皆さんのことは一生忘れられないです。私の印象ではホームステイ活動を通じ、中日の人民の友情はもっと深まったと思います。

東京に戻る日に、大部分のホストファミリーがホテルまで送りに来ていました。その場の雰囲気の影響され、多くの団員がホストファミリーと抱き合っ、涙を流していました。わたしはこの場、この時のことをいつまでも心に留めています。

最後に、今回日本でいろいろお世話になった方々へ心より感謝の意を表します。

きれいな日本

吉林省 延辺大学外国語学院 徐 英錦

日本国際協力機構の招聘を受けて、我々中国青年日本語教師代表団一行 20 名は 2002 年 11 月 26 日から 12 月 18 日まで、23 日間日本を訪問、研修することができた。

短かったものの、日本文化の理解、専門分野の勉強、実際の日本語会話の練習といういろいろな面から大切な経験をすることができた。日本に関する情報はインターネットやテレビや雑誌などで容易く得ることができる。しかし「百聞は一見にしかず」という諺のように自分の目で見た日本はより親しみがあがり、より印象深かった。また人間と人間の相互理解は交流なしにはぜんぜん期待できないという真理を、今度の訪問を通して強く感じた。

一 日本の環境

成田空港から東京国際センターまでバスで 2 時間ぐらいかかった。外の風景を見るため、私はわざと窓側に座った。本からしか見ることができなかった有名な東京タワーや東京湾や東京ディズニーランドなどを、走っているバスの中から一目見ることができ、みんな興奮していた。慌ててカメラを出し、貴重な瞬間を撮ろうとしたが、残念ながら間に合わなかった。

しかし、実際私の心を打ったのは上述のような名所古跡ではなかった。私が感激したのは日本の環境の故だった。日本がきれいな国であるということは耳にしていたが、目の前の自然は果たしてその名声のとおりだった。その清潔さに私は賛嘆してやまなかった。以前、本で理解したのとまったく同じだった。日本はほこりとちりが無い国だと言える。地面はきれいだった。泥などは見つけようとしても見つけられなかった。私には毎日靴を磨く習慣がある。しかし日本にいてる間に、私は合計 3 回しか靴を磨かなかった。

日本の自然は、実際の姿以上にその華麗さゆえに美しく見えるのではないかと私は思う。東京湾を見たときもそう思ったし、代々木公園へ行ったときも同じだった。あまりにもきれいで、これは毎日たくさんの人々が往来しているところではないのではと疑ったほどだった。

また日本の清潔ぶりは随所で感じられたが、特に日本のトイレに行ってそれを一番強く感じた。室内、室外のトイレを問わず、臭いにおいのするトイレはほとんどなかった。水を流していないトイレやゴミがあちこちに散らかっているトイレはなかった。少なくとも私は見かけなかった。

日本がこのようにきれいなのはもちろんその地理的な理由もあるが、私は日本人一人一人の心持ちが一番大きな理由ではないかと思う。町を歩いても痰を吐いたりみだりにゴミを捨てたりする日本人は一人も見かけなかった。みんながまるで一人の人間であるかのように一緒に環境を保護しようとする姿勢が、日本をきれいにし、作り上げているのではな

いかと思う。

二 日本人の性格

日本では、猫に関する非常に多くの詳しい書物がある。福を招く猫と言って絵に描かれた猫や、いろんな材料で作られた猫などが非常に高い値段で売られている。確かに日本では猫が人気あるようである。これは日本人の性格が猫に似ているからだといふ以前どこかで読んだ記憶がある。猫は普段はとてもおとなしくしているが、ネズミが一匹でも前を横切ると豹変して爪を立て、猛獣と化す。このときの怖さといつたらない。日本人は猫に似て、みんな優しそうなお顔をしているのに、いったん怒ったら刃傷沙汰にまで及んだりする。普段の日本人は哲学者のように深刻な顔がよく似合い、怒りを表に出さないくせに、いったん怒ると手がつけられなくなると聞いていたが、今度日本へ行って見て、この話が百パーセント正しいのではないと分かった。北京での説明会期間中、日本についてできるだけ新しい情報を詳しく紹介しようと気を遣ってくださった位坂和隆さん、高知県に行ったとき、いろいろなプログラムを作り、私たちがいい思い出をたくさん残せるようにと苦勞されていた前田正也さん、親切でいつも笑顔でみんなの心を暖かくしてくださった山中茂さん、退職しても自分の国の言葉を伝えようと熱心に日本語を教えている東宮将矩さん……。一人一人が親切で、暖かい人たちだった。哲学者のような深刻で冷たい顔は、彼らには見られなかった。ユーモアがあり、よく他人に配慮する人たちだった。

地下鉄のプラットフォームで手を取って歩いている恋人を見て「日本の男性もあんなに率直に自分の感情を表すのですか。感情を表に出さない冷たい人たちだと思っていたのに」と隣の日本人に言ったら「どうしてそんなふうに思うのですか」とびっくりされてしまった。

われわれ中国人団体の世話をしてくださった日本人の中にはあまり話もせず、あまり笑いもしない日本人もいて、私たちはこっそりその人を「日本人らしい日本人」と言った。確かにみんなは、薄情で心の冷たい性格が日本人の典型だと思っていたふしがある。しかし、日本人自身はそんなふうに思っていないようだ。私も今度行ってイメージが変わった。日本人の中にはもちろん冷たい人もいるが、温かい人も少なくない。道が分からないときに聞いたり、困ったことがあるとき頼んだりすると、日本人は誠意を尽くして教えてくれる。

また日本人は忠実に自分の仕事を遂行している。どんなにささやかで、地位が低いことでも、彼らは熱心に仕事をしている。他人がなんと言おうと委細かまわず仕事に熱中している。自分の仕事に熱中して他人のことにはあまり関心を持たない性格が、外国人から見たら、冷たく見えるのかもしれない。

しかし人のことに干渉しないのが、まさに礼儀なのではないかと私は思う。自分の仕事ひとつ上手にできないくせに他人のことをあつた、こうだという人より、他人のことについて何も言わない人のほうが、より心安らかに付き合えるのではないだろうか。

三 日本への感情

日本語を10年あまり習ってきたが、これまで日本に対して好きな気持ちも嫌いな気持ちもなかった。日本語と日本人は私にとっては別々の存在だった。言葉は好きで、その言葉を上手に使うのが私の夢だったが、その言葉を使っている民族を理解しようとする気持ちはあまりなかった。日本に行ける機会が少ないからかもしれない。日本語のような柔らかい言葉を使っている人たちを、私もほとんどの外国人と同じように冷淡な人たちだと思っていたし、また日本は私と非常に遠いところにあるように思っていた。

ところが、日本は近い。日本は中国から非常に近い国であるということが今度分かった。地理的にもそうであるし、感情的にもそうである。中国人に対して悪いイメージを持っている日本人もたくさんいると思っていたが、中国と中国人のために力を尽くしている日本人もいた。

最初から最後までわれわれ日本語教師団体の世話をしてくださった日本のかたがたに敬意を表したい。年を取っても精いっぱいわれわれ青年たちの短い日本滞在期間がより有意義になるように手抜きなく準備をしてくださった国際善隣協会の八島さん、妊娠3ヶ月で、気分も悪いはずなのに一日も休まずわれわれ青年といつも一緒にいてくださった神戸さん、自分の給料を中国の希望工程基金の仕事に使う前田さん…彼らが以前は知らなかった日本人を私に教えた。彼らが私に日本を親しく感じさせた。日本が好きになった。もちろん日本のすべてが、日本人みんなの心がきれいなわけではないが、きれいな日本人もいるため、きれいな日本人が多数を占めているため、日本はきれいである。

私のいい思い出

広西チワン族自治区 広西大学外国語学院日本語学部 馬 慧婕

平成15年11月26日から12月18日まで私は日本国際協力機構（JICA）の招聘を受けさせていただき、青年海外協力隊中国高校及び大学機関の日本語教師の一員として海外青年招聘事業に参加しました。

23日間の研修はあっという間に終わりました。短いけど各地を見学でき、日本文化が自身で感受できたのは良い経験だったと思っています。この度の訪問は国際協力機構（JICA）が実施している交流事業の一環で、団員は中国の各中学校、高校、大学で日本語を教えている青年教師です。この間私たちは共通活動、学校見学、日本青年との合宿、地方活動、ホームステイなどを通して、日本及び日本人に対する理解をいっそう深めました。また、お互いに日本語教育について意見交換しました。団員は中国の各地から集まった教師たちですが、お互いにある種の親近感を持っていました。

日本に着いた時は、紅葉がまだ盛んで、山々が真っ赤に染められて本当にきれいでした。11月26日午後1時半ごろ、私たちは成田空港に着きました。飛行機が着陸した時、窓から外の景色を見てなんとなく外国にいる感じがなかったです。たぶん中国と日本は同じアジアの国で、中国人と日本人は皆、黄色の皮膚を持っているからでしょう。それからバスで東京国際センターへ行きました。最初の5日間は共通プログラムです。そこで、日本理解基礎講座「日本と日本人」「戦後日本の歩み」を聞きました。

都内活動の時、青年海外協力隊事務局、国際善隣学院、凡人社、国際交流基金日本語センター、早稲田大学日本語センターを見学しました。いろいろな機関の見学を通じ、日本語教育の現状と日本の教育制度がいっそう理解できました。その中で一番おもしろくて深く印象に残ったのは河口湖での日本青年との合宿セミナーです。日本の教育関係者と直接交流できて本当によかったです。

私たちが宿泊したホテルには温泉があり、富士山も見えました。日本人は温泉が大好きと聞いていましたが、それがなぜかずっと分かりませんでした。しかし今回、自分で体験してやっと分かりました。温泉にいと悩みとか疲れとかすっかり忘れることができ、気持ちよくなりました。合宿討論では日本の温泉を話題にして議論を始めました。それから皆さんは自己紹介して自分の学校や住んでいる都市を紹介します。だんだん雰囲気が盛り上げました。中国人も日本人も自分の聞きたいことをその場で質問しました。中日の教育制度の異同や授業の仕方から、中日両国青年の生活、考え方、興味まで交流し、自分の思いを發表し、意見を交換し、お互いに参考になる経験を提供する中で、友情を築いてきました。

この合宿を通して、日本の青年が中国に対して抱く友好の念と、中国をもっともっと知りたいという思いを持っていることが分かりました。

中国にいた時から、今度の招聘計画の案内で地方活動を行う所が高知県だと知りませんが、それ以前は高知県のことを全然知っていませんでした。地図で調べると四国の太平洋側にあります。昔は土佐と呼ばれ、紀貫之の「土佐日記」はここで書かれたものだそうです。そのため高知へ行けるのを楽しみにしていました。

12月9日、私たちはやっと高知に着きました。思っていた通り、高知県は素晴らしいところでした。山も海も中国の水墨画のようにきれいで、人もとても親切です。高知県でいろいろな思い出を作りましたが、特に二つのことが今でも頭の中に残っています。

一つは一宮東小学校で一日先生を体験したことです。一宮東小学校では私たちを歓迎するため、ほとんどの先生と生徒が学校の玄関や廊下に集まり盛大な歓迎式を行ってくれました。それより感心させられたのはどこへ行っても生徒たちはいつも笑顔で、中国語で「こんにちは」と私たちに挨拶することでした。それに生徒たちはいろいろな出し物を見せてくれました。その出し物はみんな心をこめて用意したものとすぐ分かりました。学校側はわざわざグループを割り振って、私たちに日本での先生体験をさせてくれました。私が体験した授業は体育でした。生徒たちと一緒にソフト・バレーボールをやり、チームの一員として日本の学校の雰囲気を経験することができました。

もう一つはホームステイです。最初はちょっと緊張していましたが、ホストファミリーの皆さんが親切で、私を家族の一員のように待遇してくれましたから、緊張はすぐほぐれました。私のホストファミリーは入谷さん一家と立花さん一家です。両家族は親戚で、とても幸せなことに私は二つのホストファミリーがあったわけです。ホームステイを通して日本の家庭を知り、日本社会も理解できました。そこで得た知識は、今後の日本語教育での応用に役に立つでしょう。私が日本の和室の構造と日本家庭でのゴミ処理に興味を持っていたので、ホスト・マザーの典子さんは何回も私に説明してくれ、とても感動しました。ホームステイの時、家族の皆さんと一緒に映画を見たり、博物館を見物したり、遊んだりして、まるで日本人になったような気がしました。2日間はあっという間に過ぎ、ホームステイが終わってバスに乗って移動した際、皆涙が出ました。これからも私には日本に家族がいます。どこに行っても日本の家族の皆さんのことを気にかけます。

今度の研修はほんとうにいい経験でした。日本社会を理解し、日本文化を感じ、いい思い出になりました。また、今回のチャンスをくださった国際協力機構及びお世話になった方々へ心より感謝の意を表します。

日本との初対面

遼寧省 大連民族学院外国言語文化学部 元 明松

日本国際協力機構（JICA）の招請を受けて、我々中国青年教師代表団（日本語教師グループ）一行 20 名は 2003 年 11 月 26 日から 12 月 18 日まで、日本を友好訪問した。日本語を習い始めて二十年目、日本語教師になって十年目になる 2003 年の末に初めて日本に行くことができた。外国語を専門とする者にとって、対象国に行ってその雰囲気を体験することができることは嬉しいことだ。

日本人の周到的な手配

まず私たちが感心したのは日本人の用意周到ということだ。これは招聘計画の初めから終わりまで感じられた。

北京での現地説明会の時、各関係者の講演、説明、訪日スケジュール、各注意事項及び現地説明会の詳細と注意事項は、全てとても詳しいものだった。

北京でも日本でのスケジュールを説明してくれたが、私たちが東京に到着した後、日本側のスタッフは再び日本でのスケジュールと訪問先の資料を配り、説明してくれた。高知に着いた時もまたもっと詳しいスケジュールと各訪問先の資料を配ってくれた。そればかりか、朝、バスに乗っては当日の活動を説明してくれ、当日の活動が終わってはまた翌日の活動を詳しく説明してくれた。

各スケジュールの手配も、時間も場所も詳細に計画されており、結果として予定していた行事を寸分違わず実行することができた。

日本での短い滞在期間中、日本人が何をするにも丁寧で熱心であることを深く感じた。日本側コーディネーターの曲さんと神戸さん、国際善隣協会の八島さんは訪日中の初めから最後まで付き合ってくれて世話をしてくれた。この他にも位坂さん、村瀬さん、川口さん、前田ご夫妻、山中さん、梓ちゃん……お疲れ様でした。ありがとう、関係者の皆様。

見学活動と自主研修

「中国青年日本語教師訪日団」の活動は片時も休むことなく、研修・訪問の相次ぐ多忙な日程をこなした。

訪日団は中国の各中学校、高校、大学で日本語を教えている中国青年教師からなり、主に日本の教育機関を訪問した。一東宮小学校、明德義塾私立高校、早稲田大学など何カ所かの小・中・高・大学を見学した。学校の授業見学、施設参観、学生との座談会、先生とのディスカッションなどを通して日本の教育の一角を知った。そのほか青年海外協力隊事務局、国際交流基金日本語交際センター、国際善隣学院、インターカルト日本語学校、江戸東京博物館、出版社の凡人社、葉山村教育委員会なども参観した。

今回日本に行って感じられたのは、日本の学生があまり勉強しないことだ。寒いのにスカートが極端に短く、携帯電話を持ち、化粧をし、髪を染めている女子高校生がいっぱいいた。授業の最中でも何か別のことをしていた。女の子がおしゃれを追求するのは、もう勉強に夢中ではない象徴だろう。高校と大学の授業も聞き、また高校生や大学生と話し合ってみたが、彼らの知識不足にはびっくりした。埼玉県伊奈学園の学生によると、姉妹校の中国の学生と歓談したことがあるそうだが、日本の生徒は中国の生徒の知識の広さに感心したそうだ。ただし中国の生徒たちは授業の科目だけを勉強し、休みにもピアノとか習字といったいろんな教室に通い、クラブ活動の時間は少なくなっている。反対に日本の生徒たちにはいろいろな課外活動がある。一東宮小学校の太鼓演奏はすごかった。また明德義塾私立高校はサッカー・野球・相撲などクラブ活動が盛んで、日本全国でもトップクラスだそうだ。ホームステイ先の子供は小学生の時ピアノを習い、中学に入ったらバレー部と野球部に参加している。

わずか3週間の見学旅行みたいな短い研修活動だけで、日本国の政治・社会・経済・科学技術・文化及び自然景観の全貌を理解することは到底できないが、富士山、河口湖温泉、歌舞伎、河豚料理、東京の地下鉄、新幹線、神社、神保町書店街、新宿と銀座商店街、秋葉原電気街など、教科書の中でよく読んでいた日本の名物を肌で感じられて嬉しい。多くの優しい日本人に出会い、その人たちと友達になれて嬉しい。自分の日本語の聴力と会話の能力を高めただけでなく、日本への理解を深められて嬉しい。これからの勉強と研究のためになるものをいっぱい持って帰って嬉しい。

授業見学、関係教育機関での講座、ディスカッション、合宿やホームステイ、市内観光、自主研修などを通して、いろいろな角度から日本及び日本人に対する理解をいっそう深めた。今回、日本人の生活をこの目で見、この身で感じることで、多くの教科書の知識以外の成果を得ることができた。今回の訪日全体を通して私自身の日本語運用能力にも更に磨きをかけることができた。

合宿とホームステイ

ほかの団員の報告書はまだ読んでいないが、みんな一番印象深かったのはきっと合宿とホームステイだと思う。それぞれわずか2泊3日だったが、割合時間に余裕を持ってその活動を味わえたからだと思う。

河口湖での合宿セミナーは私に深い印象を残した。日本の教育者と直接交流できて本当によかった。私たち中国人日本語教師は日本各校からきた先生と教育関係の問題について検討し、自分の思いを発表し、意見を交換して、お互いに参考になる解決方法を提供し、交流する中で、どんどん友情を築いた。

合宿のディスカッションで話題になったのは教育のやり方についてだった。お互いに自国の教育状況を紹介してから問題とその解決の道を探してみた。日本の学校では15年前から詰め込み方式をゆとりのある教育方式に転換したそうだ。結果的に学習指導要領の教育内容も量的に減少し、学習意欲の無い子供を増やし、生徒の学力が低下し、校内ではいじめが絶えず、改革は明らかに失敗だったと考えられている。今の中国もその段階に位置し

ているのではないかと思われる。詰め込み教育は学生の人間性が育たない、個性を無くす、圧迫感を持つというようなデメリットがあるが、ゆとり教育方式にも弊害がある。一つは基礎知識の習得不足で、もう一つは本来勉強嫌いの生徒に勉強をしない理由を与えてしまい、勉強したくない人間がますます増える点である。ディスカッションの参加者の多くがこの「ゆとり教育」に賛同せず、詰め込み教育に戻るのにも心配だった。でも誰も解決の方法を出せなかった。

でも、その後、ホームステイ先の二宮さんのおかげで、日本でも人気のある教育家——蔭山英男校長先生の講演を伺った。蔭山氏は二十年の教育経験を踏まえ、詰め込み教育とゆとり教育の反省から知識より「自ら学ぶ意欲」と「勉強できる体力と元気」を重視する「新学力観」を唱えておられた。「それはもつともだな」と感じた。これが今、中国でブームになっているいわゆる「素質教育」の指導方針あるいは解決策ではないかという気がする。

でも、日本人の中国知らずにはびっくりした。一東宮小学校で小学生と座談するとき、4年生の一人から「中国には山がありますか」と質問された。小学校4年生にしろ、こんな質問はおかしいと思われる。4年生には地理という科目があるはずなのに。また大人の日本人の中でも、今の中国人がどんな生活をしているか分からない人が少なくなかった。モダンなビル、高級自家用車、ファッションなどはないと思い込んでいた。それはきっと中日両国の人々の間の相互理解がまだ欠けているからだろうと思う。だからまず国と国ではなく、同じ人間と言う立場から人と人との理解を深めることで、またその積み重ねによって国と国との理解ももっと深められるのではないかと思う。

団員の中には日本で極右分子による反中国デモを見かけたことがある者もいた。三省堂書店と靖国神社には中国を侮辱する書籍と侵略戦争を美化する本がいっぱい並んでいた。しかし、日本訪問を通じて日本人、特に日本の一般民衆は平和を愛し、中日両国間の平和共存の現状を大切にしていると感じた。

私が入ったホームステイ先は高知県須崎市立中学校の教頭をしている二宮さんの家だった。その家は洋式と和風を混ぜた二階建てで、ソファも畳もあって、ダイニングとキッチンがオープン式だった。ここからも二宮家族は現代的な日本家庭だということがわかった。4人家族で奥さんも小学校の先生で共働き、長男は高2、女の子は中2。お父さんも威張っていないし、子供も親を恐れていなかった。いわゆる亭主関白という感じはぜんぜんなかった。奥さんが早く戻れないときは、よく二宮さんが料理を作るそうで、現代の日本家庭を再認識した。日本人の男は大人も子供も優しくなった。民主的で睦まじくて暖かい雰囲気溢れていた。それに家族みんなが音楽好きで、父と兄はギター、母と妹はピアノを引きながら家族音楽会を催すのに惹かれ、私も歌を歌いたくなった。

玄関に入ったとたんに、中国語で書いた「欢迎元明松 你是我的朋友 很开心和你认识」という張り紙に気がつき、暖かいものが心に沁みこんできた。短い2泊3日だったが、行き届いた世話してもらった。おせち料理、カラオケ、神官との相談、良心市、呉服店、市内観光、高知城、日曜市…いろいろといい思い出を与えてくれた。毎晩ビールを味わいながら、中国のこと、日本のこと、いろいろしゃべってみた。日本の首相と中国の総理になったつもりで、中日両国の交流を顧み、将来を展望してみた。話が弾んで12時過ぎになった

ことにも気づかなかった。

家族3人が歓送会に参加してくれ、4人で「乾杯」という歌を歌って、みんなから熱烈な拍手を浴びた。嬉しい。カラオケで練習した甲斐があった。高知を発つ日の朝、二宮さんはわざわざ学校から休みを取って、2時間も車を走らせて高知のホテルまで見送りにきてくれたばかりでなく、私の研究に役立つと思った本まで贈ってくれた。日本人の優しさに感動させられた。わずか2泊3日で一生忘れられない友達になった。もし中日両国の人々がみんなこんな愛のこもった心で付き合うなら、軽蔑と恨みを捨てるなら、中日友好なんか口に出さなくても永遠に続くだろう。

合宿で出会った日本人の友達、ホームステイの家族にも心から誠に感謝申し上げます。

大都市と田舎町

日本企業も日本人も多く、国際都市になりかかっている大連市に十数年も住んでいる私にとっては、日本に行っても「外国だな」という感じはそれほど強くなかった。ただどこに行っても人々が日本語で喋っていて「やっぱり中国ではないんだ」と感じただけだ。

東京に行ってもただ「大連より大きい都市だ」と感じただけで、町がきれいだ、埃が無い、緑が多いと驚いたことは別に無い。大連もきれいな観光都市だから。でも縦横に走っている地下鉄にはびっくりした。「東京人は地上だけでなく、地下でも走っているんだな」とつくづく感じた。道路の狭さにもびっくりした。車も多いし、高架橋も多いし、それに高層ビル、店、住宅などの建物が道ぎりぎりにぎっしり詰まっていて圧迫を感じる。物価の高さにもびっくりした。中国の十倍はする。ちょっとしたラーメンでも一杯で700円はする。おいしいことはおいしいけど。本も高い。専門書だったらもっと高い。今度、自分の研究に役立つものを手に入れるのに12万円も払った。「左の目からは嬉しい涙がほろほろ、右の目からは悲しい涙がほろほろ」だった。(注：下線の部分は高知希望工程の前田正也さんの話を引用した) 東京では何でも高いのだ。東京での生活は便利なのは便利だけど、でも、つらい。

第3週は高知県で過ごした。県庁所在地としての高知市は人口が33万人で、大体大連市の開発区にあたる。高層ビルもほとんどない。産業もほとんど無い。商業も発達していない静かな小さな町だった。高知に着いた2日目の夕方、学校見学が終わって、自主活動で町をぶらぶらしてみたが、ショッピングしようとしても品物が無い。7時過ぎたら店はもう閉店し始め、食事しようとしても料理屋が見つからない。町を歩く人も少ない。タクシーはほとんど空車。慌しい東京とはまったく違った雰囲気だった。東京ではあまり感じられなかった不景気というものが高知ではつくづく感じた。

高知出身の坂本竜馬は明治直前に法制と開放を唱えながら大金を出して大政奉還まで促した革命人で、高知で一番有名な人である。町の所々に彼の名前や画像が掲げてあり、高知の空港まで高知竜馬空港と名づけられていた。「竜馬が泣いているよ」と高知で知り合った友達に話したら、向こうは無言だった。それに反駁するためか、高知から東京に戻る前の日に、友達は私を高知城の近くにある日曜市と商店街に案内した。確かにここは私たちが泊まっているホテルの付近よりは賑やかだった。そこからそんなに遠くないところなの

に。でも、県の商業センターにはふさわしくない規模だった。

盃の好きな土佐人よ、土佐鶴は放せよ、刃物は見せ物ではない、使うものだ。竜馬を口にだけするのではない、その精神を生かすべきだ。元気出せ！ 頑張れ！ 遠くの中国から応援するよ。純朴で素直で熱情な高知人が好きなんだから。

私の目に映った日本人

①公德意識の強い日本人

日本人にはタバコを吸いながら道を歩く者が少ない。必ず灰皿のある所で吸うことになっている。吸殻を道端に捨てる人もいるが、ほとんどの人が携帯灰皿を持っている。

日本人は特に音声を気にする。道でも電車の中でも大声で喋る人はいない。携帯電話の使用も遠慮する。ゲームを楽しむだけ。道路がどんなに込んでいてもクラクションをかけない。オートバイは別だ。新幹線の中で、私たちはうれしくて写真を撮ったり話したりしたが、ほかの人たちは静かに座っていた。

日本人は時間にやかましい。何をするのにスケジュール通りにやる。待つのも、待たせるのも嫌いなようだ。私は2回も遅刻して厳しく注意された。

日本人は規則をちゃんと守る。例えば、人々が自覚して交通規則を守っている。赤信号を突き進む車は一台もない。いくら急いで道を歩いている人でも青信号になるまで待っている。

②笑顔、親切、思いやりを重んじる日本人

TICの食堂のおばさんたちはいつも笑顔で駆け足に近い速さで料理を届けてくれた。待たせるのはまずいと思っているだろう。

高知の世話役の山中さんとは梓ちゃんはいつもにこにこしながら案内してくれた。私たちはその笑顔を見て、疲れが多少少なくなったと感じた。

友達との付き合いで買い物に行ったとき、デジタルカメラに詳しくないため、店員の説明がよく聞き取れなかった。店員はいらだっているはずなのに、笑顔で何回も繰り返して説明してくれた。日本のサービスの良さは有名だが、この店員のサービスを通してそのことをしみじみと感じた。在日中、何回も道に迷ってしまった。人に道を聞いたところ、笑顔で詳しく説明してくれた。辻まで来てどこへ曲がったらいいか迷っていると、後からついて来てもう一度教えてくれた。

工事現場には標識があるばかりでなく、誘導する人もいて、できるかぎり工事で迷惑をかけないようにしようとする。

雨の日、店先には傘を置くところがあり、持って店内に入る場合、店員がビニールカバーをかけて、ほかのものが濡れずに済むように気配りしてくれる。

人に優しいという点も日本社会の特色である。

③自分の力を無視しない日本人

今回、日本で出会った日本人のうちの多くの人が自分の力を微力だと思っていなかつ

た。高知希望工程会の前田夫婦と山中さんは、ほぼ個人の力で中国の希望工程を助けている。その勇気は敬うべきだ。

また、多くのお年寄りが60代、70代になっても社会のために、国のために、人類のために自分なりに何かをしている。国際善隣協会の八島さんを始めとする多くのおじいさんたちが中日友好のために元気いっぱい頑張っている。ほかに年を取っても専門家に負けず、何かを勉強するおじいさんもいた。彼らは自分のやることが無駄だとはぜんぜん思っていなかった。

この点から見たら、日本が今の世界第二位の経済力をつけたことにびっくりするまでも無いと言っても言い過ぎではないだろう。

提案

最後に、僭越ながら今後少し変えたらもっとよいのではないかと思ったことを言わせていただきます。

それは見学内容を充実すること。すなわち、馬を走らせて花を見ること（编者注：通り一遍の見学という意味の中国語の諺のこと）ではなくて、各研修地でもっと長く滞在し、見聞したいものを十分に味わわせること。そのためには、

- ① 9時にホテルから出発するのではなく、9時に目的地に到着すること。
- ② 同じレベルの研修内容を減らすこと。
- ③ 同じ目的・同じ需要を持つ人のグループを作ること。すなわち中学、高校教員と大学教員を分けること。

末筆ながら、改めて関係者のみなさんに感謝を表したいと思います。

初めての海外研修旅行

新疆ウイグル自治区 新疆師範大学外国語学院 茹先 伊明

日本国際協力機構の招聘を受けて、私たち（18人の日本語教師）は2003年11月26日から12月18日まで日本を友好訪問しました。私たちはみんな日本が初めてですから、今度の研修旅行は私たちにとってとてもいいチャンスでした。期間は23日で、ちょっと短かったです。日本の風土、人情、文化生活、教育事情などを知ることができました。

11月26日に東京に着き、27日から日本での忙しい毎日から始まりました。今回の訪問は交流範囲が広くて、活動内容も豊富でした。東京、埼玉県、高知県での小、中、高、大学の授業見学、日本側の先生たちとの交流は、私たちの視野を広げ、今後の日本語教育に有益なアドバイスとなりました。

12月4日、日本の伝統芸能・歌舞伎を鑑賞しに行きました。行く前にみんな「ずっと4時間見るのはつらいんじゃない」と言っていたのですが、歌舞伎が終わった時、みんな歌舞伎のすばらしさに感心させられました。

12月5日、河口湖へ行きました。ここでとても楽しい3日間を過ごしました。合宿にいらしゃった日本の方々には半分以上が私たちと同じ歳なので、すぐ友達になり、いろいろなことについて自由に話すことができました。先週、合宿のとき同じ部屋に泊まった日本人の友達から年賀状をもらい、とてもうれしかったです。

12月9日に東京を離れ、高知県に来ました。今度の研修旅行の中でいちばん忘れられないところは高知でした。高知は私の故郷と同じでどこからも山が見えるので、うちに帰ったような感じでした。高知での見学活動が終わって、一生忘れられないホームステイをしました。行く前は私だけじゃなく、みんなとても緊張していました。それまで全然知らない外国人一家と2泊3日も一緒に暮らすのはちょっと想像できないことですね。その上、私が行く家には犬が5匹もいました。とにかく行く前にみんな「どうしよう、もし言葉が通じなかったらどうしよう」といいながらお互い別れましたが、ホームステイから帰ってきた時は、みんな「本当に楽しかった。ホームステイの時間がもうちょっと長かったらいいのに…」といいながら再会しました。私もとても楽しい3日間を過ごしました。5匹の犬とも友達になりました。この家族との友好関係を一生続けたいのです。

今回の訪問を通じて、私はいろいろな角度から日本を理解することができました。専門分野に関しての理解もより一層深めることができました。たくさんの友達もできました。日本人のお爺さん、おばあさん、お母さん、お父さん、妹もできました。JICAと中国科学技術部がこんな貴重なチャンスを下さったことに感謝申し上げます。

私が見た日本と日本人

湖北省 湖北師範学院外国語学部 楊 鋼

日本の文化と文学にたいへん興味があり、それで日本語を勉強し始めた。それはもう6年前で、大学1年生のときであった。いつも「いつかこの作品の中に描かれた美しい国へ行けたらいいな」と思っていた。今回、日本国際協力機構が実施した中国青年招聘計画のおかげで、青年海外協力隊日本語教師グループの一員として、日本へ研修に行くことができた。23日間だったが、忘れられない経験だと思っている。

1、日本の町について

日本についての印象と言えば、まず感心したのは清潔な環境である。成田空港を出て、幡ヶ谷にある TIC まで高速道路を走ったが、どこを見ても清潔な印象を受けた。海に近いせいか、その空気も殊のほか新鮮で爽やかだった。

その後、町へ出かけ、どんな所でもゴミは全然見受けなかった。一日中ずっと外を歩いても靴は泥のしみひとつついていなかったのである。

また、日本の町は車が多いという感じもした。高速道路でも渋滞することがあった。東京の大通りは中国ほど広くなく、自転車専用レーンもない上に、歩道も狭い。日本は中国のように広い国ではないのに、車の数が多いのだから、交通はたいへんである。私たちが乗ったバスも何回か渋滞にあった。それは東京のような大都市の大きな問題であると思う。



それに対して、日本の地下鉄と電車は非常に発達している。地下鉄なら渋滞がなく、到着時間も正確だ。だから、多くの通勤者が利用している。ラッシュアワーの地下鉄は人がいっぱいになる。日本の鉄道は JR のほかに、私鉄もたくさんあるから、地下鉄路線図を見れば、東京の地下は空洞のように鉄道でいっぱいである。気をつけなければ、乗り間違えてしまう。

「実地日本語会話練習」のとき、私があとで自分だけで地下鉄が利用できるようにと、東京で仕事をしている日本人ボランティアは、私を連れて地下鉄に乗ったが、帰る時、彼も間

違えて、ほかの電車に乗ってしまった。路線が多すぎるからである。でも地下鉄はとても便利で、どこへでも速く行ける。

2、私の目で見えた日本人

日本に行く前、私は日本人がまじめで、時間を守り、集団意識が強いなどということをよく聞いた。今回日本へ行ってから、もう一つの印象があった。それは他人の邪魔をしないということである。

自由時間の時に町で出会った人たちはどんな時でも、どこでも、交通規則を守っていた。道に迷った時、通りがかりの人に道を聞くと、いつも親切に教えてくれた。地下鉄の駅のエスカレーターでは誰もがごく自然に左側に立って、先を急ぐ人に右側を開ける。

また、電車の中で新聞を読む時、誰もがその新聞をできるだけ小さく折りたたみ、他人の邪魔をしないようにしている。これが私の目から見た日本人であった。

3、日本の教育について

今回の研修は小学校から中学校、高校、大学、日本語研究センターなど11ぐらいの教育機関を見学した。東京は大学と日本語研究センターが中心、高知県は小学校と高校が中心であった。

今一番印象に残っているのは、高知県の一宮東小学校である。その日、可愛い小学生たちから、非常に熱心な歓迎を受けた。小学生はみんなとても活発で、かわいかった。私たちはその小学生たちと楽しい雰囲気の中かで授業を体験した。中国に比べて、日本は個人としての資質を高める面での教育をより重視していると思った。

その点については高知県の明德義塾高等学校を見学した時もそう感じた。その高校には中国からの留学生も何人かいた。みんな中国の高校卒業生であった。彼らは日本の高校で一年間日本語を勉強してから、日本の大学入学試験に参加する予定である。「日本の教育は中国と比べてどんな違いがありますか。」と彼らに聞くと、みんなこう答えた。日本の講義は面白い。いつもゲームをしたり、デスクッションをしたりしている。そういう授業は楽しいと思う。生徒たちはいろいろな活動を通して、学習に対する参加意識と積極性を引き出されることになる。

また、高知西高校では、英語の授業をする時、40人のクラスを4つのグループに分けて、別々の教室で講義をする方法も採用していた。人数が少ないため、生徒は話す機会が多い。それはとてもいい方法であると思う。われわれ日本語教師にはとてもいい勉強になった。私もこれからの授業にこういう方法を取り入れてみたい。

4、合宿とホームステイ

今度の合宿は山梨県の河口湖で行われた。そこは富士山も見えたのでうれしかった。また日本人の先生たちと一緒に泊まって、セミナーをして、いろいろな活動を通じて中日両国の教育問題や日本人が知っている中国と、中国人が知っている日本人などについて意見を交換した。日本人の先生方はみんな親切で詳しい紹介をしてくれた。河口湖で初めて温

泉に入った。また初めて富士山を見たのが忘れられない。たいへんいい経験であったと思う。

ホームステイは高知市であった。私は浜口さんのお宅で2日間お世話になった。土日も仕事がある浜口さんは、私を友達の仙頭さんに任せた。彼にも本当にお世話になった。その前はずっと心配していたが、その2日間、おいしい料理を食べ、高知城の見物に行き、能と狂言を見に行くことができた。また海浜にある水族館にも行った。私も中華料理を作り、食べてもらった。私を家族の一員と見てくれたので、本当にうれしく、楽しかった。

帰る前、団員の皆さんとホームステイの家族の皆さんとが抱き合って、涙を流した時のことは永遠に忘れられない。

今回の研修はとても有意義であったと思う。日本での活動はすべてよかった。今後もできるだけこの経験を学生たちへの教育に生かすつもりである。また中日両国の友好関係が永遠に続いていくことを祈る。

ありがたい思い出

貴州省 貴州大学外国語・国際教育学院 何 薇

自分の目でありのままの日本、ありのままの日本人を見るのは日本語教師にとって念願かもしれない。私も例外ではない。

ずっと前から、日本文化や文学に興味を持っている。だから日本語を勉強する前、日本の小説をすこし読んだ。そのおかげで、日本文学や伝統文化などについて少しは知っていた。

茶道、生け花、歌舞伎などは私にとっていわば神秘だ。一度だけでもいいから体験したいのに、なかなかチャンスがない。日本語を専門としている私から考えれば、これは一番残念な事だと言ってもいいだろう。授業中、日本文化や日本人の生活について学生に教える時、本に書かれたまましか説明できない。自分の考えや感想はぜんぜんなかった。こうした時、いつもこれは畳の上の水練じゃないか。体験できればいいなあと考えた。

今回 JICA のおかげで、とうとう日本に行け、念願が叶えた。

日本に着いた日から活動がたくさんあり、毎日忙しかった。12月4日、やっと歌舞伎を見に行った。見学する前に粗筋を八島さんが紹介してくださった。でも、みんな日本の歌舞伎が中国の京劇と同じような代物だというイメージがあった。だから相変わらず分かるかどうか心配した。はじめは「絵本太功記」だ。これは武智光秀が自分のお母さんを別人と誤って殺したという場面だ。武智光秀、即ち明智光秀は天正10年、本能寺で織田信長を殺し、その11日後に豊臣秀吉に殺されたということは知っていたけど、歌舞伎の内容は少しも知らなかった。それでこの歌舞伎が楽しみだった。いよいよ始まった。何となくわくわくした気持ちになった。

最初は、その節をつけた話し方があまり分からなかった。でも、だんだん派手な服や見事な演出に引き付けられた。見れば見るほど好きになった。終わった時、もう夢中になったほどだ。まさかそんなふう好きになるとは思わなかった。帰国して、学生に歌舞伎について説明する時、もう机上の空論ではないと思った。自分の感想や感動も言える。これは本当にありがたいね。歌舞伎を見学できたことにすごく感動した。

でも、感動したことはそれだけではない。高知滞在期間中、明德高校で、生け花も体験した。



生け花の発展の歴史や「三材一致」という基本理論については以前から大体わかっていたけど、自分でしたのは初体験だ。

茶道も同じだ。四畳半の茶室に入るのは、私にとって、何とも面白いものだ。茶道の礼儀作法などをこの目でつぶさに見た。そして少し稽古した。今後、授業中にもし学生に茶道に関する紹介をするとき、この私でも少しはやってみせることができる。それは最高ではないだろうか。

日本に行く前に、十数人ぐらいの日本の方と付き合いがあったことがある。でも彼らは中国にいた日本人だ。日本にいる日本の方はどうだかわからない。今度行って、日本の青年たちと合宿したり、日本の家庭にホームステイしたりして、生の日本の方といい友達になった。そして、ホームステイ先の家庭はまるで自分の日本にいる家族みたいだった。みんな優しく、親切な人たちだ。生の日本の方と出合ったら、生の日本社会を討論するのは当たり前だ。

そして、うちのグループは日本語教師代表団だから、討論の話題も教育に関するものもあった。みんなは「詰め込み教育」と「ゆとり教育」を巡って、いろいろ討論した。これを通して、日本の教育制度がもっとわかるようになった。以前は日本の子供がすごく辛いと思ったが、みんなと話し合っただけで比較した結果、中国の子供がより辛いということを知った。また日本の学校ではいじめ現象だけではなく、学級崩壊もすごく多いということもわかった。もし、日本へ行かなければこれはわからなかつたろう。

確かに、生の日本社会や生の日本の方をもっと知りたがれば、日本に行って、自分の目で、日本をありのまま観察するのが一番便利で直接的かもしれない。帰国後、自分の見たもの、自分の知っているもの、自分の考えたことなどを学生に生き生きと教えるようになった。これは私だけでなく中日友好の架け橋になるという責任を持っている学生にとっても、日本を理解するチャンスとなるのではないかと私はこう考える。

光陰矢のごとし。帰国してから既に一ヶ月ほどが経った。でも東山魁夷の「風景開眼」というエッセーの中に、違うところへ行って違うものを見ること、それは大切な体験だと書いてあったように、今度の体験は確かに大切に、忘れられない思い出になった。

終わりを告げた日本留学のゴールドラッシュ時代

2004年1月5日付「北京青年報」掲載記事

「北京青年報」記者 曾 偉

★さらに高まった留学のハードルと強まる生活面のプレッシャー

2003年11月26日から12月18日にかけて、日本国際協力機構（JICA）の招きに応じ、中国科技部中日技術協力事務センターが組織した中国青年日本語教師訪日団は、日本の教育事情視察のため20日あまりの視察を行った。視察団は、JICAと国際交流基金日本語国際センター、国際善隣学院、早稲田大学、国際キリスト教大学など複数の教育機関を訪問した。

この間JICAは、中日両国青年座談会、合宿、ホームステイなどの多彩な交流活動を企画した。20日あまりの視察で、視察団メンバーは多くの日本の教育界関係者、青年、一般市民及び中国留学生と幅広い交流を行った。中国から参加した青年教師は日本の教育事情を理解し、日本の進んだ教学経験を学ぶだけでなく、日本社会と日本文化を直接体験する一連の活動を通じて、近距離から日本を観察し、日本を理解し、更に進んで両国の交流と理解を深めることができた。

☆さらに高まった留学のハードル

2003年11月中旬に日本の法務省入国管理局は、2004年4月以降、中国を含む一部の国と地区からの留学生に対する留学申請ハードルを高くし、さらに厳しい要求を加えることを決定した。聞くところによれば、以前の規定に比較して、今回入国管理局は主として申請人の日本語レベルと経済能力に対し、更に明確で厳格な要求を出した。日本語レベルにおいては、日本語学校入学希望者は日本語能力検定試験4級合格以上の証明が必要となる。もし申請人が現時点で合格証書を提出できなければ、150時間（学時）以上の日本語学習受講の証明を提出し、日本の学校側が中国で独自に試験を行い、入学の可否を決定することもできる。直接大学や大学院入学を希望する留学生は「日本語能力試験」2級以上の合格証書提出、あるいは「日本留学試験」（中国国内では未だ未実施）200点以上（400点満点）の日本語成績証明の提出を求められる。

経済能力において、新規定は保証人の過去3年間の年度毎の収入証明書の提出を求めている。預金証明書（現在、日本語学校は一般的に300万円あるいは3万ドルの3ヶ月定期の預金証明と、預金証書コピーの提出を義務付けている）提出にあたっては、同時に入金と出金過程の資料（入金過程に関する通帳コピーなど）提出を義務付けており、ビザ発行官に申請人が十分な留学経費を持っているかどうかを総合的に判断できるようにしている。規定では日本の直系親族が保証人となることを許可している。この他、新規定公布後、か

つてビザ発行官による面接試験を受けていなかった中国人学生は、来年からこの面接試験を受けることになる。留学コンサルタント関係者は、2004年4月に日本留学を予定する中国人留学生は、一般的に2003年11月から12月くらいに申請書類を提出することから、自分が条件を満たしているかどうかについて規定とよく照合し、万一問題があってもすぐに対応できるようにと、特に注意を促している。

☆玉石混交の語学学校

日本留学申請には高校卒業以上の学歴、あるいは一般大学課程を独習し、大学1、2年の学習レベルを持つことが必須となる。同時に一定の日本語力の基礎が必要であり、もしレベルが低すぎたら、まず日本語学校で1年以上日本語を学び、規定の成績を満たして初めて大学入学申請ができるようになる。

日本には各地に語学学校が存在するが、その設立にあたっての性格や背景が異なるため、玉石混交である。現在日本には300の語学学校があり、外国人に日本語を教えている。記者は東京で数多くの日本語学校を見学した。

東京銀座の繁華街に位置する国際善隣学院は、学生数は多くなく、2学年で60～70人しかいない。これは外務省管轄の社団法人国際善隣協会が1990年に設立した非営利の学校である。国際善隣学院は主として高校卒業生を募集しており、毎年2回、4月と10月に分けて募集している。そのうち4月入学生は入学期間が2年間で、10月入学生は1年6ヶ月で、どちらも3月に卒業する。日本語教育と同時に、各人の希望によって進学指導、生活指導、福利厚生面での指導を行っており、優秀な学生に対しては奨学金も支給される。ここ数年、卒業生のほとんどが日本の大学に進学しており、一部の学生は東京大学や早稲田大学などの有名校にさえ進学している。

日本の一部の大学では日本語教育の専門部門を設けている。日本で最良の私立大学の一つである早稲田大学では、日本語研究教育センターを設け、学内の外国留学生をその対象としている。一般的な読む、書く、聞く、話すという日本語能力の養成だけでなく、講義の聴講や文献資料閲覧、レポート作成、スピーチや討論などの必須能力に対するハイレベルの学習機会を提供している。同校は通常の入学方法以外に、公費あるいは交換留学生、外国政府と公立機構の委託研修学生も受け入れている。入学期間は1年間で、毎年150名を受け入れ、半年1回、4月と9月の入学となる。

その他の語学学校は一般的に規模が小さく、そのほとんどが繁華街の、狭く込み合ったオフィスビルの中にある。中国国内の一部の語学学校に比べて、こちらはずっと窮屈であり、教育設備もごく普通のレベルである。しかし教育方式は比較的活発で、クラス内での教師と学生間の働きかけも盛んで、日本語環境に身を置く中国学生にとって、このような環境で日本語を学習することは、中国国内に比べてその習得がずっと速くなることは当然である。懸念されるのは学校規模が小さく、実力が劣るため、経営リスクに対する抵抗力が弱いことである。中国人留学生と日本の一部の学校間の紛糾事件については、近年折に触れて報道されている。日本の語学学校入学にあたっては、事前によく調べてその良し悪しを見極めるようにしたい。特に学校の規模や背景を様々な角度から知り、もし日本に友

人がいて代わりに実地調査をしてもらえらるなら何よりである。仮にそれが無理でも、留学関連で定評のあるホームページを調べれば、常々各学校に対するランク付けを行っている。この他、日本の入国管理局も過去 1 年間の学生の不法滞在率をもとに、各学校を優良校と非優良校に区分しており、中国人学生にとっては参考となる。

☆中国人学生にとってどのような日本の学校が適しているのか？

聞くとところによれば、日本の高等教育機関はほぼ 5 つに区分される。すなわち、大学、大学院、短大、高専、専門学校である。相対的に見れば、中国人学生にとっては後者 3 種への入学機会が多い。短大は通常 2 年制で、多くが外国語、秘書、旅行、美術、教育、保健、家政、社会科学などの実用的な専門課程を設置している。卒業後は短大卒業証書と関連する資格証書を手に入れることができ、日本での就職の機会が与えられる。さらに研鑽を積みたい場合は、関連学科の大学本科 3 学年への編入も申請できる。大学（本科）と比べて短大は入学が容易で、期間も短く、学費が安いなどの強みがある。高専は通常 5 年制で、専門的に技術者を養成する学校であり、工業専科学校と商船専科学校が主である。卒業後は「準学士」の称号を得ることができる。高等学校は一般には直接外国人学生を募集しないが、ごく一部の学校は編入学申請を受け入れている。専門学校は通常 2 年制で、職業教育を主としている。卒業後は規定の試験合格後、関連する国家資格証書を得、それにより就職機会を得ることができる。海外の学生が専門学校入学を申請するためには、一般に 2 級以上の日本語合格能力が必要で、学校による面接試験を受けることになる。現在、コンピュータ関連の専門学校が日本において人気がある。日本の製造業はとても発達しているため、日本の大学では一般的にエンジニアリングなどの工業系専攻が高い教育・研究レベルを有しており、一部の基礎研究は相対的に弱い状態である。中国人学生が専門に基づいて留学先を決定する際には、自分の興味に基づき、日本の大学の特徴も考慮しつつ具体的な目標を設定すればよい。

☆直面せざるを得ない生活と勉学双方向からのプレッシャー

日本に留学する全ての中国人学生が真剣に考えるべきもう一つの問題は、自分が双方向からのプレッシャーに耐える心構えができてきているかということである。一般的に外国人学生は語学学校で 1 年半から 2 年間、または大学予科で 1 年間学び、その後大学や専門学校に合格できない場合、日本の残留資格を失い、帰国を余儀なくされる。また日本の大学の学費は高く、通常日本の大学の第 1 年度に納めるべき学費は 80 万から 130 万円の間である。加えて日本の高い物価レベルから、生活費としての毎月の支出も少なくない。家庭が裕福ならともかく、アルバイトをしなければ大学どころか生活を維持するのも困難なのである。

生活と勉学という双方向からのプレッシャーは、中国国内の安逸な生活から海外へ飛び出した中国の若者たちにとっては耐え難いものである。重圧に耐えかね、一部の中国人学生は進学をあきらめ、全ての時間をアルバイトにつぎ込み、最後は入学期間を超えて帰国せず、不法滞在者となってしまう。これも日本が留学生へのハードルを高くした主な原因の一つである。好景気時代と比較し、仕事も減り、物価も高い今の日本において、過去の

ように留学を利用してアルバイトで稼いだ黄金期はもうやっては来ない。現在の日本留学の目的は「知識を学ぶ」というその本来の目的に、より一層回帰しているのである。

以上

